

特63
385

赤穂義士研究會編纂

一勇齋國芳畫

赤穂
美譚

義士銘々傳

明治
43. 7. 14
交

東京 日吉堂發行

緒言

頃者武士道鼓吹の聲四方に起る、武士道は日本人が持つ
する大和魂が、一種の型に依りて精純なる物となつたもの
であるといひ得るならば、今の世に何の必要が在り得るに
武士道を鼓吹する必要が起つたであらう、或る者はこれ
に依りて漸く墮落せむとする趣味の復活を期すると云ふし
又た或る者はこれに依りて漸く輕佻華美のみを是れと爲し、將
に沈衰せむとする國民の元氣を興奮せしめやうとの目的
からであるとも云ふ
世態は時と共に遷り、人情風俗の之れに伴ふは得て人々の
如何とすべからざる大勢である。さらば今日我々の

落せむとする趣味の傾向も、柔弱に流れむとする國民の元氣も、これ世の變遷に伴ふ社會の大勢であつて、層々たる人力の得て防ぐべくもあらぬ現象であるといはねばならぬが、古代希臘のソロンが、各國を遊歴して其の郷國たる雅典に歸ると、國民は諸種の黨派に別れて互いに相睨視して、國力が日々に銷沈するのを觀じた、此の際彼れソロンは盛んに詩歌を作つて國民の元氣を旺盛ならしめ、再び他邦に劣らぬ強國を興し得たと云ふ歴史家の言が果して事實ならば、世の風潮を指導し、國民の元氣を詩歌に依て振作し得ぬとは云へぬ。

如何にも現今の國民の趣味は墮落せんと爲つゝあるであらう、又た輕佻なる氣風の漸く盛んになつたのは争はれ

ぬ事實である、ソロンならずとも愛國の士は、今其の甚だしからざる秋に起ち、詩歌に或ひは文章に或ひは又た講演に、國民の趣味を向上し、元氣を振作するの道に出づるは當に然るべきことである。

我が赤穂四十七義士が、世は太平に慣れて漸く柔弱の風上下に漲らむとする元祿年間にて、突として純日本武士的の壯舉を敢て爲したる一事は實に奇蹟さすべき事である。見よ世は治まりて國の秩序は立ち、徳川幕府の威令は天下に行はれぬ隈もなかつた。而して彼等義黨の仇と狙ふ吉良上野介は、上杉家なる大名の保護に隠れて金城湯地の中に在るではないか。斯る強敵をば貧弱なる浪人が世を忍びながら討たむとするは、殆んど蟻螂が斧に

類した舉と云はねばならぬ。
凡百る壓迫は加はつた、金力と威力とを以て彼等義士の
上に加へられた迫害は吾人の意外である。然しながら
忍ぶべからざるを忍び耐ゆべからざるに耐えて、昔々と
して奇蹟の幕を開くべき準備は整ふた。討入りの壯舉は
元より壯舉であるけれども、吾人は彼等が偉大なる迫害
に遭ひつゝ、少しもこれに恐れざりし勇氣と智さに、深
く感服せねばならぬのである。
各人が行爲は舉げて巻中に在るから茲に贅せず、如何に
彼等が能く忍び、盡忠報告の四字を心に銘して固く團結
してゐたかは實に驚嘆に値するものがある。絶ゆる間な
き迫害に遭ひながら、彼等の忍耐は能く彼等をして十分

なる戦闘力を整へしめた。見よ彼等が仇家に討入りたる
状の堂々として且つ敏捷なりしかを、其の本望を達して
泉岳寺に赴かむとするや又た之れ白晝堂々血鎗を掲げて
一糸紊れざる隊伍を組んでゐたでは無いか。
彼等の精神は唯だ忠、其の行ひや極めて堂々たるものが
あり、これ即ち他より見て殆んど奇蹟に類する壯舉を
敢て遂げしめた原因である、即ち我が武士道的精神は彼
等に依つて遺憾なく模範的に實現されたのである。
眞に彼等の行爲は日本武士の精華を萃めたものであると
共に、彼の壯舉は當時漸く墮落せむとせる士氣を鼓舞し
たことが非常であつた。長夜の眠りより醒めたる上下は
盛んに武を練りて向上の意氣を示した。斯くも時代精神

を激刺し得た彼等の傳記は、直ちに取て以て之れを詩歌とも稱すべくして、精練されたる無韻の詩と云ふに雖も異論はあるまいと思ふ。
今の世國民の元氣漸く衰退せむとする秋ならば、ソロン等の詩歌なられども、吾人は我が此の無韻の詩たる義士傳を提供し、開が振作に資する所があつたならば幸ひは單に著者のみでは無いのである。我が此の四十七士傳は此の如き意味から生れたものであるから、若し事實に異る所があれば大方識者の修正を俟つのである。

明治庚戌の春若鷲の朝を聞きつゝ、

柳 涯 漁 夫 識

赤穂義士銘々傳目次

浅野内匠頭長矩	一
大石内藏之助良雄	五
大石主税良金	九
赤垣源藏重賢	三
大高源吾忠雄	七
神崎與五郎則休	一
武林唯七隆重	五
堀部彌兵衛金丸	九

堀部安兵衛武庸……………三三

不破數右衛門正種……………三七

菅谷半之丞政利……………四一

潮田又之丞高教……………四五

小野寺十内秀知……………四九

小野寺幸右衛門秀富……………五三

間喜兵衛光延……………五七

間重次郎光興……………六一

間新六光風……………六五

村松喜兵衛秀直……………六九

村松三太夫高直……………七三

寺坂吉右衛門信行……………七七

勝田新左衛門武堯……………八一

岡島八十右衛門常樹……………八五

大石瀨左衛門信清……………八九

倉橋傳助武幸……………九三

横川勘平宗利……………九七

近松勘六行重……………一〇一

矢田五郎左衛門祐武……………一〇五

奥田定右衛門高行……………一〇九

速水藤左衛門滿堯……………一一三

前原伊助宗房……………一一七

杉野十平次治房……………一二一

千葉三郎兵衛光忠……………一二五

貝賀彌左衛門友信……………一二九

岡野金右衛門包秀……………一三三

富森助右衛門正固……………一三七

三村治郎左衛門包常……………一四一

片岡源吾衛門高房……………一四五

吉田忠左衛門兼亮……………一五九

吉田澤右衛門兼貞……………一五三

茅野三平常世……………一五七

茅野和助常成……………一六一

中村勘介正辰……………一六五

矢頭右衛門七教兼……………一六九

間瀬久太夫正明……………一七三

赤穂義士銘々傳

赤穂義士研究會編纂

淺野内匠頭長矩

Naganori, Asano. 享年三十五歲

淺野内匠頭長矩は、五萬三千石を領して播州赤穂の城主である。

幼少の頃から文武の道に剛み、父友長公に代つて家督を相續してか

らは、能く臣下の者を慈愛を以て率ゐ、恩威兩つながら並び行はれ

たものであるから、多くの家臣は此の君の爲めならば水火の中も厭

はぬと、衷心からして慕ひ仰ひたのであつた。

昔から武備ある者は必らず文備ありと云ふ如く、殊に武勇を愛し

て一藝一能のある武士を見ると、禮を厚うして臣下に加へた長矩公

は、又た一面に於て和漢の學に心を潜め、和歌風流の道の如きも亦

赤穂義士銘々傳目次 終

間瀬孫九郎正辰……………一七七

磯貝十郎左衛門正久……………一八一

木村岡右衛門貞行……………一八五

原惣右衛門元辰……………一八九

浅野内匠頭源長矩



TAKUMINOKAMI, ASANO,

決して等閑にはせず、深く其の道に達してゐたのであつた。然るに元祿十四年三月のこと、例に依て朝廷より幕府に對し、勅使及び院使が下向することになつて、勅使柳原大納言保貞卿、高野中納言保春卿の御二方は、浅野内匠頭が攝伴役を勤めることになり、院使清閑寺中納言照貞卿の攝伴役は、伊豫國吉田の城主伊達左京亮宗春が勤めることに幕府より仰せ付けられたのである。

勅使を攝待するには、諸種と町重な、複雑な儀式がある。而して徳川幕府の中で、此の儀式の事を掌つてゐる家を高家と云つて、元祿十四年の頃に於ては、吉良上野介義央と云ふ人が其の筆頭であつた。それ故愈よ勅使が來着されると、开が攝伴役たる浅野内匠頭及び伊達左京亮は、上野介に就いて何角と儀式上の指揮を受けるやう頼んだのであつた。元より役柄のことであるから、上野介に否やは

無い、然し當年六十歳の上野介は、實に武士に在るまじき剛愎の性で、多く賄賂を取らねば、快く他に物を教ねることを爲ない、所が内匠頭は清廉潔白な人であるから、無事儀式が済んだ後ならば兎に角初めより賄賂を贈ると云ふやうな卑屈なことをせず、唯た役目大切にと上野介の指揮をば仰ぐのであつた。

貪慾なる吉良上野介は、多くの賄賂もがなと待つてゐた甲斐もなく、淺野家からは何物をも持て來ぬので、犬糞的に内匠頭をば苛め初めた。伊達左京亮には懇切に何角と教えるが、内匠頭には態と間違つた事をば教ね、それをば内匠頭の落度のやうに、諸大名満座の中で罵詈雑言し、嘲笑して非常な恥を與えたのである。無念骨髓に達するけれども大切の役目を負ふた内匠頭は堪へ忍んで獨り涙を飲んだ三月十四日のこと、今日にて攝伴役も濟むと云ふ日、又もや忍ぶこ

との能ない侮辱を受けた、血氣盛んなる内匠頭は、遂に堪忍の緒を切り、松の廊下に於て上野介に出會ふや、突如小刀を抜き、遺恨重なる上野介を目菟けて斫付けた。卑怯未練の上野介は、大いに驚き大聲を揚げて救ひを求めながら逃げると、梶川與三兵衛なる者が後より内匠頭を抱き止めたので、遂に本懐を遂げ得なかつた。

殿中はこれが爲に一時騒動したが、旋て内匠頭は田村右京太夫方へ預けられ、續いて其の日切腹仰せ付けられ、赤穂五萬三千石の領地は改易となつたので、茲に家臣の面々は各自に住み慣れた赤穂の城を後に爲て退散せねばならぬ事となり、中にも金鐵の如く忠義の心堅き四十七義士が、主君の仇をば討つことになつたので、内匠頭が行ひは聊か短氣の嫌ひは免れないが、良き臣を有たが爲めに美名を後世に残すことになつたのである。

大石内藏助良雄

Muranosuke, Oishi. 享年四十五歳

内藏助良雄は、祿高一千五百石を頂いて、城代國家老の要職を勤めてゐた。元は藝州の藩池田玄蕃と云ふ人の二男であつたが、十二歳の時大石頼母に懇望されて、遂に其の養子となつたものであるのだ。幼少から頗る伶俐で、大いに將來に望みを囑されてゐたが、大石家へ養子に来てからと云ふものは、他から晝行燈と云はれる位に要領を得ぬ人間と化て了つた。然しこれは彼が聰明であるから態と斯の如く振舞つたので、眞貫の愚鈍者で無かつた證據には、未だ二十歳の弱年で、其の當時何人も怖れてゐた。山鹿素行と云ふ軍學者をば、無事赤穂まで送り届け、多くの人をば驚かせたのでも判るのである。内藏助の山鹿送りは有名な談話であるから、今委しくは説

大石内藏之助藤原義雄



KURANOSUKE ŌISHI,

かないが、さらでも文武の道に秀で、わた彼は、此の大學者の素行に就いて山鹿流の軍學を學び、其の蘊奥を極めたのであつた。

然るに元祿十四年三月十四日、主君内匠頭が殿中にて上野介を及傷に及び、淺野家は斷絶と云ふ知せが、江戸に在た原總右衛門、茅野三平の二人が早打となつて届いたので、赤穂家中は上を下への大混雜となつた。其の時智謀優れた内藏助は咄嗟の間に思案を定め或ひは籠城、或ひは殉死など云て、家臣の面々が忠義の程をば試し最後に残つた五十餘人の眞の忠義に堅きを信じ、茲に城を渡して各自時機を見て主君の仇をば報るやうと評議を定めたのである。

されど太平の世に仇を狙ふと云ふことは非常に困難なことである況して敵手は世に時めく高家の筆頭吉良上野介である上に、縁者なる上杉家が後楯となつて、萬一の用意に嚴重に用心してゐるのであ

るから、其の困難なることは尋常普通では無い。そこで内藏助は赤
 穂を退散すると共に、京都の邊なる山科村に居を占め、名を池田久
 右衛門と改め、茲に永住する者の如く見せたのであつたが、吉良家
 から赤穂浪人殊に城代家老たりし内藏助の動靜を探る間者が絶えず
 來るので、彼はこれを欺かむが爲め、或ひは心にも無き高利貸を營
 み、或ひは酒色に耽溺して、少しも復讐の念などの無きが如く扮
 たけれども、猶ほ敵を安心するに足らぬので、彼は苦心慘憺の末
 老母及び妻子を、妻が實家に放ち歸すの慘劇を敢て爲たのであつた
 高き君恩に報ゆる忠義の鐵石心とは云へ、斯くも悲惨なることが世
 に在るであらうか、語るも實に涙の種である。

表面の行ひは兎もあれ、胸中深く秘めたる大望は寸時も彼の心よ
 り去らず、密かに同志の者を指揮し、万一にも誤り無からむことを

期してゐた。する中に吉良家の用心も次第に緩み、又た密かに江戸へ出て敵の動靜を探つてゐる人からは、次第に時節到來の旨を傳へて来るから、旋てのことに彼も江戸へと出で、日本橋石町に假住居を爲てゐるのであつたが、元祿十五年十二月十四日吉良家に茶の會があること云ふ確なことが判つたので、主君の仇を報ゐるは正に此の時である、豫て用意を爲したる火事装束に身を固め、名を思ふ同志四十六人を率ゐて、降り積む雪の中を本所松阪町なる吉良家へと志し、自ら表門の總大將となつて討入り、遂に恨み重なる上野介の首級をば討ち取り、同志と共に拵一掃して泉岳寺へと引き揚げて主君の墓前に首級を手向け、それより暫らく細川家へと預けられてゐたが、翌年二月四日最も名譽ある切腹をば仰せ付けられ、忠臣義士の龜鑑と後の世にまで謳はれてゐるのである。

大石主税良金 Oshika, Oishi 享年十六歳

主税は内藏助の嫡子である。世にも優れたる斯の父あり、然して世にも稀なる斯の子があるのは決して不思議では無い。主税は父母に事へて洵に孝心深く、柔順に其の教を守つて未だ嘗て反いたことが無い。とは云へ世の所謂唯だ弱々しい質では無く、身の丈は他に優れて高く、十四五歳で早や壯年の者の如く見たのである。自然武藝も頗る巧手で、殊に弓を射ることは彼が最も得意と爲てゐる所であつた。嗚呼想へば花ならば夢の年を、君恩を思ふの深きよりとは云へ可惜散らしたのは、實に惜むべきことである。

主君内匠頭は、内藏助を信すること此の上も無く、此の主税が生れた時も、特に其の邸へ臨んで祝はれた。十四歳の時赤穂を退散し

大石主税藤原良金



OIKARA. OISHI,

て父と共に山科村に在たが、内藏助は常に主税が誕生の節に特に主君がお祝ひ下された鴻恩及び彼が四五歳の時、厩より思ふ馬を曳き出して興えられた慈悲などを語り、死を以て君恩を報ずべきを諭したのであつた。これを聞く主税は元より義を金銭の堅きよりも固きに思ふてゐるのであつたから、諸種の艱難辛苦が襲ふて來ても、少しも撓む所なく、常より孝心深き彼が、身を斬らるゝよりも辛き思ひで、山科村で母に別れ、涙を飲むで消ゆく慕はしき母や祖母の後影を見送つた時の心は何處であつたらう。

されど大義親を滅すとか云ふ如く、主税は堪わられぬ此の苦痛を忍んで父に従ひ、凡百艱難を凌いで東へ下つたのである。愈よ吉良家へ討入る時となつて、彼は裏門の總大將たる役を侷められ、斯る場合ひ辭むべきでも無いから、吉田忠左衛門、小野寺十内を後見と

なし、遂に大役を引受けたのであつたが、今日を限りの生命と思ひ
定めた事とて、勇氣日頃に十倍し、奮然として鎗を提げながら奥深
く踏込んだのであつた。然しながら鎗は彼の得意とするところで無
い、暫くして腰る左文字の大刀を抜き放ち、猶も奥へと進んで行く
前に當り、上野介が嫡子なる左兵衛と云ふのが現はれ、奥へは遣ら
じと防ぎ止めるのを、主税は焦つて撃ち込むと、左兵衛は受け損じ
て肩先五寸ばかり研り下げられた。柔弱なる左兵衛はこれに避易し
て奥深く逃げ込むのを、主税は逃がさじと追ふた。時に吉良家にて
も恥を知る武士の左右田孫四郎と云ふのが現れて撃て蒐るので、
これを敵手に戦ふたが、又もや主税は孫四郎の眉間をば研り付けた
ので、孫四郎は到底叶はじと庭の方へと逃げ出した。主税は道さじ
と追ふたが、如何なる機であつたか、足をば踏み滑らして泉水の中

へと轉び落ちたので、夫を見るなり孫四郎は鎧を延べて突からうとする危急の時、片岡源五右衛門が駆け付け、主税を助けたものであるから、之に力を得て遂に孫四郎をば討ち取たのであつた。

冬の夜寒に水に濡れたが、幸ひ着換の衣服が在たので、直に夫と改め、又も勇戦を爲て、多くの敵をば討ち取たのであつたが、目出度上野介の首級をば收めて、勇氣凛々として泉岳寺へ引き揚げた後、彼は髪に濡した小袖を火にて乾かしながら、潜然として眼に涙を溜めた。早くも夫と見て内藏助が其の理由を正すと、彼は赧然としながら此の小袖は母上の記念なれば、斗らずも思ひ出したのであると云たので、並居る義士は彼が斯る場合にも猶ほ母を思ふ孝心の深いのを嘆賞したのであつた。散るには惜き蕾の花も、忠孝兩つとも全くして、譽れある名を残したのであつた。

赤垣源藏重賢 Genzo, Akagaki.

享年三十五歳

源藏重賢は、知行二百石を頂き、馬廻り役を勤めてゐた人である。忠臣義士として後の世までも名を残す程の人に、何れ愚は無いけれども、源藏は主君長矩在世の時には、殊に恩寵の深いものがあつた。これは長矩が彼の飾り無き行ひを愛したからで、武術に於ては殊に鎧をば巧みに遣ひ、又た文事にも長てゐたのである。

主君が殿中に於て刃傷の飛報が赤穂に知れると共に、彼は先登第一に内藏助に面して指揮を仰ぎ、如何なる苦難を嘗めても、君恩に報するの盟約を結んだので、赤穂を退散して江戸に出て本所に浪居してゐたが、已れの實兄鹽澤伊左衛門と云ふのがあつたので、敵の動靜を探る隙を見ては、近しく兄の家へと出入を爲てゐた。而して彼

赤垣源藏藤原重賢



GANJOO. AKAGAKI,

が最も嗜む酒を飲み、遣る無き悲憤の思ひをば、僅に慰めて時の
 來るのを待つてゐるのであつたが、嫂は彼が常に酒を飲むのを好ま
 ず、遂には面會することさへも爲さなくなつた。
 大望を控へた彼は、斯る事には少しも頓着しない。身に弊衣を纏
 ひながらも常に酒をば飲んでゐた。態を斯くして世間なり又たは兄
 等の疑ひを避け、而して時機の來るのを待つてゐたのである。然るに
 元祿十五年十二月十四日、愈よ今宵は仇の邸へ討入りと云ふことに
 なつたので、彼は他所ながら兄に暇乞ひを爲やうと、雪の中をも厭
 はず、一升徳利に酒を用意して、兄の邸を訪ふた。所が兄弟が此の
 世の縁が薄かつたか、兄は主用を以て四谷の方面へと行き、其の歸
 宅時間も知れぬこのことであるから、源藏は大いに落膽を爲ながら
 せめて嫂に面會をと頼んだが、平素より好かぬ人の事として不快と云

て面會を謝絶したのであつた。茲に於てか源藏は如何とも致し方なく、せめてもと兄なる人が平素着する所の紋服を乞ひ、それをば壁間に掲げ、涙を流しながら現在兄なる人の其處に在すが如き有様で生別旋て死別の旨を告げ、酒杯を呈し、且つ戴きつゝ已れも訣別の杯を銜むたのであつた。而して此の殆んど狂に類する源藏が態度を傍らより眺めつゝあつた下婢に向ひ、確と今日源藏の來りたる旨を傳へよと云ひ付け、残り惜げに立去つたのであつた。

大酒はすれども心元より亂れざる源藏は、それより直に内藏助等と共に泉岳寺に集り、諸種の準備を爲して日の暮るを待ち、旋てのこと吉良邸へ討入た時には、裏門なる大石主税の手に屬して、討入るや否や長屋の屋根へと飛び移り、貝賀彌左衛門等と力を協せて半弓をば板戸に射かけ、吉良家の家人が出て防ぐのを、先づ第一に

堰き止め、それより長槍を提げて奥へと勇み進んだ。
 奥は最早や亂戦であつた。勇猛無比なる源藏は、敵手撰ます奮戦して多くの敵をば討ち取つたが、旋て最後の目的たる上野介の首級は義士の手に入つた。千辛万苦を嘗めて漸く素懐を達するを得た彼等は、天を拜し地を伏して喜んだ、これ元より當然のことである。斯くて泉岳寺なる主君の墓前に上野介の首級をば手向け、源藏は内藏助等十七人と共に、細川越中守の邸へ預られることになつた。昨までは君恩を報るる爲め的手段として、時に多大の飲酒を敢て爲したる源藏は、茲に積日の望み足りて最早や高風霽月、胸に何の思ひも無くなつた。昨日に變る謹直の行ひ、唯だ端座して地下の主君の傍に赴くの日を樂み待てゐたが、翌二月四日同士と共に勇しく切腹を賜り、忠義悌愛の名を後世に垂れたのであつた。

大高源吾忠雄 Gengo, Otake. 享年三十二歳

源吾忠雄は近習役を勤め、知行百石を頂いてゐた。歴代淺野家に仕わて忠節の譽れ高かつたものである。幼少より兵馬劍槍の道を勵んで、頗る練達する所が在たが、殊に眼を和漢の書に曝して、兵學に秀てゐたのであつた。武士として武道の練達は當然のことではあるが、彼は又た武勇絶倫なる半面に於て、深く風流の道を味ひ、俳名を子葉と云て、當時の名人其角などと往來を爲し、又た山田宗遍に就いて茶道の修業をも積んだのであつた。

江戸から青天の霹靂の如く凶報の傳はるや、一家中の者は大いに驚き騒いだ。然しながら平素より精神を練れる彼は、凶事を知ると共に唯だ報國の思ひに臍を堅めたるばかり、泰然として評議に列し

大源吾源忠雄



GENGO. OTAKA,

大いに劃策するところが在たのである。

義心^{よしこころ}を結んで江戸に出た彼は、浪々の身を幸ひに深く茶道^{ちやうだう}を極むる傍ら、吉良家の動靜を知るに便せんが爲め、茶の名匠山田宗遍の門に遊んで、常に吉良家に茶會のある日^ひを知らうと努めた。旋て元祿十五年十二月十四日となり、今宵こそは愈よ討入りを決行しやうとする日であつたが、細心な源吾は猶ほ油断せず、折柄年末の事として何れの家^{いへ}に於ても煤拂ひを爲るので、源吾は賤しき町人に身を扮し、煤竹賣と化して吉良家の様子を窺ふて後、賣れ残りの竹をば擔いで笠も持たず、哀れの姿を爲て兩國橋をば渡らうと爲た。

其の時彼方より豫て知己なる其角宗匠が來蒐り、不斗源吾を認めて呼び止め、永々の浪人にて斯く零落せりと云ふ源吾の言葉を信じいとも氣の毒に思ふて羽織を脱ぎて與へ、猶ほ何角と慰めた末、流

石に風流の道に遊ぶ人だけあつて

年の瀬や水の流人も人の身も

其角

と書いて示したので、これを打ち見た源吾は、筆をば借り受けて

あした待たるゝ其のたから船 子葉

と脇句を付けたのであつた。斯くて源吾は其角と別れたが、其角は源吾が付けた句の意味が何うしても判らない。其の頃日本第一の宗匠であつたが、今宵を期して亡君が修羅の鬱奮を晴さんが爲め、彼等四十七義士が吉良家へ討入らうとは、如何な其角でも考え及ばなかつたものであるから、何う考えても此の句の意味を知ることが能なかつたのは、寧ろ當然のことであつて、翌日復讐のことを聞くに及んで、膝を拍て感心したと云ふことである。

斯く一面風流な源吾は、同士と共に討入ると共に豫ての勇力を出

し、表門の先陣となりて門を破り、味方を導いて奥へ進んだのであつたが、吉良の家來新谷彌七郎と名乗る者を、唯だ一刀の下に斬り棄たのを始めとして、敵にても剛勇の聞え高き小林平八郎と云ふ者をば討ち取り、其の他當るを幸ひ薙ぎ斫たのであつた。

恨みに燃え、忠義に凝た義士等の奮戦に、有樂上杉家から附けられた武術の達人等も、遂に敵することが能なくて、兎怯未練に逃げ隠れてゐた上野介の首級は義士の手に入つた。勇躍して引き揚げる途に於て、一同と共に酒を飲みたる時、源吾は

山を抜く刀も抜けて今朝の雪 子葉

と口吟んだのであつたが、斯る時に於て平素の吟懐を遺る其の心掛は、實に嘆賞するに餘りあるでは無いか、洵に文武兼備の眞の武士と云ふのは、蓋し大高の如きを云ふのであらう。

神崎與五郎則休 Yigoro, Kanzuki. 享年三十八歳

則休は淺野家譜代の臣で知行三百石を頂き、馬廻り役をば勤めてゐたのである。天性剛氣無双で、同志の武林唯七、堀部安兵衛等と並び稱された武術の達人であつた。然しながら彼は唯だ武邊一途の武士では無く、幼少の時から讀書を好み、和歌俳諧、道にも達してゐたが、武勇餘りある人として、時に他から無氣者、亂暴者と云はれるやうな行ひが無いでも無かつたが、主君長短在世の時に於ては能く身を謹み、忠勤唯だ是れ勵んだものであるから、主君の寵愛も亦た尋常一様では無かつたのであつた。

所が時なる哉元祿十四年三月の異變が起つたので、與五郎は直に義黨に組した。然も彼の家には年寄た一人の母が在たが、孝心深き

神崎與五郎源則休



YOGOROU. KANJAKI,

彼は、唯だ一人の老母を打ち棄て國を去るのを深く嘆いて、自づこ其の色が外に現はれたのであつた。婦人の身とは云へ、忠義の心堅き老母はうれを見て取り、愈よ出立と云ふ日になると云ふと、常よりも機嫌よく何角と打解けて楽しく語つたが、寐たる後の朝となると、忠義の爲めに殺す身の、後に年寄た母などが在ては、それが爲めに心引かれて不覺を取るやうなことが在てはならぬから、一足先に死出の旅に出る、汝は必ず十分の働きを爲よと云ふ書置を残してあはれ勇ましくも自害を爲て果てたのであつた。

これを見た與五郎は、暫らく追暴の涙に暮れたが、旋て氣を取り直し、斯くなつては主君の仇、又た我が母の仇を討たねばならぬと更に深く決する所があつて、山科なる大石の許を訪ね、其の指揮に依て江戸へ出て本所林町に假住居を定め、暫らくは扇子賣となつて

吉良家の動靜を窺ふてゐたが、早や多少の準備も成た所から、再び山科なる内藏助の所に行き、旋て共に東に下る事となつた。大事を控へた大切の身であるから、決して粗忽又は短氣な事を爲すとは、常に内藏助が與五郎に諭した言葉であつたが、彼も此の言葉を身に沁みて刻んで忘れなかつた。然るに此の度内藏助と共に江戸に向つて出發した途、岡崎の宿まで行た時、彼は少しく都あつて唯だ一人別れることになり、内藏助よりは後れて東海道を歩いてゐると、岡崎の宿に於て午餉を喫やうと、偶ある掛茶屋へと入つたのであつた。すると何れよりか馬喰の丑五郎と稱する悪雲助が出て来て、彼に無法なる云掛りを云ひかけた。武士に向つて無禮を爲す雲助の一人や二人、彼與五郎の相手としては取るに足らぬものであつたけれども、彼は内藏助の戒めを守り、敢て怒らないばかりで

なく、無法にも雲助が強請する証文を認め、一旦の怒りを忍んで江戸へと出たのであつた。
時機の臻るを待つ料にと、彼は同志が言行を書き止め、これを赤穂盟傳と名けて一味の者に見せ、僅かに討を遣たと云ふことであるのを見ると、彼が學才に長てゐたのは能判るであらう。此の風流心ある彼は、討入りの當夜となるに、豫て期したる主君の仇、又た母の仇を討つと云ふ覺悟で、内藏助の指揮あると共に表門より討ち入り、猛獅の勇を振ふて突撃し、上杉家より附け置かれたる武術の達人と渡り合ひて之れを斃し、味方の危き者ある時には、大刀を振つて之れを助け、實に目覺しき働らきを爲たので、着せる装束は紅に染んでゐたと云ふことである。本望を遂げた後は水野監物方に預けられ、旋て同志と共に榮ある花と散たのである。

武林唯七隆重

Tadashichi, Takegayashi.

享年三十二歳

唯七は近習役を勤め、知行百石を頂戴してゐた淺野家譜代の臣である。幼少の時に父を失ひ、母の手に依て育てられたのであつたが資性頗る剛勇で、長ずるに及んでは武術の精妙を極め、忠義の心が厚く、殊には主君長矩公とは乳兄弟の由縁が在たものであるから、一層主君大切と仕わたるのであつた。元より長矩に於ても、彼が純忠を愛され、多少の失策の如きは措いて問はれなかつた。
父無き後を育てられた高恩を知る唯七は、母に事へて孝養至らぬ限もなかつたが、悲しや主家滅亡の悲運に際會して、彼は實に斷腸の思ひで、直ちに義黨の一人に加つた。然しながら復讐の事に付ては、假令親子と雖も、同志以外の者には決して知らせては爲らぬと



TADASHICHI, TAKEBAYASHI,

堅く約束を結んであるから、彼は母にも知らせず、赤穂退散の後は暫らく京都に假住居を爲てゐたのであつた。旋て機熟して復讐の秋が迫つた。彼は慈悲深き老母に當座の別れを告げ、其の夜は快く眠りに就いたのであつたが、翌朝なつて母の部屋に伺候すると、賢明なる老母は早くも快舉あることを推知し大いに激励したる遺書を机の上に残し、敢なく自刃を遂げてゐるのであつた。孝心深き彼は此の有様に一層の憤激を加へた。君父の仇は俱に天を戴かすの古語の如く、必らず君と母との仇をば我が手を以て討たねばならぬと決心したのである。

果然討入りの夜となると、彼は大高源吾と共に急先鋒となり、大きな掛矢で以て門、板戸の嫌ひなく打ち破り、大刀を振りかざして踏み込んで、上杉家から附人となつてゐる二刀流の名人和久半太

夫をば力戦して斃したのは、實に目覺しい働きであつた。而して彼は猶ほ勇を振ふて奥へと進んで行き、旋て上野介が寢室へと踏み込んで行くと、其處に間新六も居合して室内を探したが、何れへ逃げたか影も無いのである。兩人は残念なりと思ひながら床を改めると猶ほ少しく温味の残つて居るので、斯は正しく遠くへは未だ逃げてゐないと、更に勇を鼓して改め始めたのである。

すると床の間に拔道の在るのが知れた。兩人は雀躍しつゝ、開を傳つて行くと、旋て後庭の物置小屋の前に出たので、能く氣を留めて見ると雪の上に足跡がある。唯七は槍をば差し延べて戸の外より此處ぞと思ふところを突き探つて見た。果然、果然確な手答わがあるので、兩人は戸を排して進み、逃げ行く小坊主には目も掛けず、白の寢衣を着たる老人をば襟頭取つて引き出した。嗚呼これぞ苦心慘

憺して求めてゐた上野介である。唯七と新六とは直ちに用意の呼子
 笛を鳴らした。喜びに満てる義士は仇の周囲を取巻いた。卑怯未練
 にも此の場となつても未だ生命を道れんと、言を百方に托して自己
 が上野介たることを白状せぬ。然しながら去歲内匠頭が與えたる額
 の刀痕は、正しく主君の仇たる上野介たることを語つた。
 仇の首級は擧げられた。用意周到なる内藏助が豫て準備したる輕
 舟は、兩國橋より水路を走せて泉岳寺にと向つた。舟の中には唯七
 及び間の兩人、仇の首級を守つて儼然として控えてゐたのである。
 望みを遂げたる同志は、途中万一の事あるやも知れずと、擬首級を
 ば槍に貫いて堂々として引き揚げたのである。斯くて忠勇無比なる
 唯七は、主君の仇、又た母の仇をば思ふ如く自ら討ち、満足して英
 名を後世に残して屠腹したのであつた。

堀部彌兵衛金丸

Yabei, Horibe. 享年七十八歳

彌兵衛金丸は、知行百五十石を頂戴して、江戸留守居役をば勤め
 て、極めて忠義の心が深い人である。幼少の時から文武兩道に勵み
 諸般の藝に達してゐた中にも、軍學は山本流の奥義を極め、槍を持
 ては非凡の腕前があつたのである。中山安兵衛が、高田の馬場に於
 て多くの武藝者を敵手となし、天晴れ叔父の仇討を爲たのを聞いて
 大いに感じ、直ちに交渉して養子と爲たが、是れ彌兵衛が太平の世
 に在ても武を忘れず、自家の繁榮を思ふたのに他ならない。
 元祿十四年三月十四日、主君が殿中に於て刃傷された時、先づ何
 よりもこれに對する善後策及び當座の所置を爲ねばならぬのは、實
 に留守居役たる彼の任務であつたが、此の大變事に際して、老練な

堀部安兵衛源武庸



YASUBEI, HORIBE,

彌兵衛は、實に最も善き、而して最も機宜に適したる手段に出て
 周章たる家中の者を静め、國元なる赤穂への通知は元より、僅な時
 間内に於て美事に邸を引渡したのは、實に感心せねばならぬ。
 彼は此の時既に七十七歳の高齡であつたにも拘はらず、其の壯健
 なることは驚くばかりで、鍛錬として壯者も及ばぬほどであつたの
 で、是れ實に彼が平素武藝を鍛練すると共に、能く其の心身を練た
 結果として、此は壯健の身たるを得たるのである。一旦の騒ぎが
 濟み、彼は固く大石等と盟約する所があつて、旋て居を矢の倉に移
 して妻子と共に居たが、養子たる安兵衛は此處に同居することを爲
 なかつた。愈よ討入りの夜となるに、四十七士の面々は彌兵衛の宅
 に於て訣別の杯を擧げたが、此の時彌兵衛は今や數時間ならぬに頭
 上必死の運命が來てゐることも思はぬか、暫時の骨休めと云つて隣

室に退き、雷の如き聲を發つて眠つたのであつた。旋て時刻となる
と、大石は他の同士を率ゐて本所に向つて出發したが、其の時家人
に向つて、老體のことなれば、必ずしも討入りの場に加はるに及ば
ぬから緩乎と休息させるが可からう、と云つて出たのであつた。
されど老たりと雖も彌兵衛金丸、今宵の大事を前に控えて安閑と
眠つてゐるやうな不覺はせぬ、豫て約されたる九ツ時少し前となる
と、彼は勃乎と起き上り、手練の槍を手に爲たが、家人は雪中のこ
とでもあるからと、今死に行く人の身を思ひ、甥なる堀部淺右衛門
同じく九十郎の兩人して川端まで送らせたのであつたが、兩國橋の
畔に於て同士と出會ふたので、家人は此處より歸らしめた。
如何に氣丈なりとも七十餘歳の老年であるから、一同の者は内心
大いに危んでゐたのであつた。ところが脚一步仇の門を入ると、弓

の腰は張りて勇氣凜然として踏み込みに安心を爲てゐると、彼は牛づ何者にも目を掛けず、玄關に掛け並べてある弓の弦を切り、槍の穂を斬り落して、敵の武器をは奪つたのである。恁は頗る老練なる者で無ければ考え及ばぬことで、彌兵衛の如き人にして初めて混亂の中で此のやうなことが能るのである。

これより彼は猶ほ進んで小林平八郎なる寶藏院流の達人と槍を交え、一度は椽より落ちて既に危ふからんと爲たのであつたが、彼が一心籠めて下よりエイと繰り出した一突に、倒れながらにして敵を倒したのであつた。少壯の者ばかりを敵と爲しながらも、彼は身に一の疵をも受けないで本懐を達した。誠の心は鬼神をも泣かしむると云ふ古語の如く、彼は非凡の高齡なるにも拘はらず、誠忠の一念は遂に非凡の名譽ある最後を遂げたのである。

堀部安兵衛武庸

Yasubei, Horibe. 享年三十四歳

安兵衛は知行三百石を頂戴して、馬廻り役を勤めてゐた。武勇を見込まれて江戸留守居役堀部彌兵衛の養子となつたので、元は越後新發田の浪人で、中山安兵衛と言つたのである。古來君父の仇を討た忠臣孝子は敢て少くないが、僅の生涯を以て三回の仇を討たと云ふ人は、先づ無いと云つても宜いのである。

安兵衛の父は安太郎と云つたが、新發田を浪人するの己む無きに至つたので、未だ幼少の安兵衛を連れて浪々の身となつた、而して東北偏在の地で寺小屋を開いてゐたが、或る夜病床の上にある時忍び込んだる悪漢の爲め、憐れにも果敢なき最期を遂げたので、其の物音に眼を醒したる安兵衛は、未だ八歳の幼少の身でありながら、



YAHE. HORIBE,

起あがつて曲者の跟をば追ひ、一念凝た恨みの刃に見事に父の仇を
 ば斃し、涙ながらに其の靈を慰むるのであつた。
 それより叔父菅野六郎右衛門の方に引取られ、劍法の修業に身を
 委ねたが、天性劍客となる資を供えてゐたのであるか、其の上達頗
 る速かであつたが、十八歳の時武者修業にと出で、上州の劍客樋口
 十郎左衛門に就いて念流を學び、旋て幾年ならずして其極意に達す
 ることが能た。さらばとて一旦恩を受けたる故郷の叔父を尋ねた所
 が叔父は故郷には在らで江戸へと赴かれた後であつたので、其の跡
 を跟ひながら彼は江戸へと出たのであつた。
 斯て彼は暫らく放縱なる生活を爲て日を過した。然るに唯一の叔
 父は江戸の武者村上正左衛門兄弟及び津川勇門弟等三十餘人より
 決闘を申し込まれ、高田の馬場に於て雌雄を決することになつたの

である。然も其の事少しく時刻の過ぎたる後安兵衛の耳に入つたので、一時は驚いた、驚いたが躊躇すべき場合で無いから、彼は何の用意の暇も無く大刀腰に高田の馬場へと駆け付けた。ところが一歩遅かつた、叔父は唯だ一人、敵は三十餘人の多勢で以て今漸く斬つた所であつた。剛氣の安兵衛は奮然として怒髪大を衝き、荒繩の禰を結ふ暇も無く多くの敵手に向はんとした。其の時見物の一人であつた堀部彌兵衛の妻及び娘が、安兵衛の爲めに紐を解いて禰を爲さしめたのが縁となり、後に堀部家へ養子となつて、主君内匠頭に仕わることになつたのである。

叔父を惨殺された安兵衛は、猛虎の如く怒つて立つた。三十餘人の武藝者は、唯だ一人の敵と侮つて笑つた。然しながら劍尖火花を散らすに至つては、誰として安兵衛の敵となる者が無い、見る間に

三十餘人の卑怯なる骸は高田原頭に横はつた。此の時の安兵衛が勇戦實に目前に見わるやうでは無いか。

此の武勇を愛して彌兵衛は養子と爲た。剛勇無比な安兵衛は又た一面金鐵の固きよりも堅き忠孝節義の大精神を有てゐたので、平素君に仕えて忠、親に事へて孝道を盡してゐたが、元祿十四年三月の異變を聞くと共に義士の列に加はり、鐵石の如き忠義の心より自己が面に焼火箒を當て、姿を變じて仇家の様子を探るべく江戸へ下り、賤しき八百屋に身を扮して、幾層の苦辛を嘗めたのであつたが旋て時は來つて討入りとなつた時には、經驗多き太刀先鋭とく斬りまくり、衆に先んじて勇戦奮闘して敵を斃すこと數知れずと云ふ有様であつた。實に安兵衛のやうな人は武士の龜鑑として後世永く尊敬せられる實質を有てゐる人と云はねばならぬ。

不破數右衛門正種

Kazunemon, Fuwa. 享年二十四歳

數右衛門正種は、近習祐筆を勤めて知行百石を頂戴してゐたのであつたが、身の丈拔群に高く、臂力衆に越えて鞍馬神道流の奥義を極めてゐたのである。殊に其の据物切と云て所謂試切りを爲すは最も得意と爲てゐる所であつたのである。然しながら天性頗る率直で物に拘泥せず、一意君公の爲めに奉公するので、多少の缺點は在ても、内匠頭は之れを咎めずして愛撫したのであつた。

ところが習癖と云ふものは、時によると何人をも失敗せしむるもので、彼は一年新刀を購入した所が、未だ其の切れ味を知ることが能なかつた。然るに赤穂城下なる紙屋某の妻が病死したと云ふことを聞き、彼の妻なる者の素行宜しく無かつたのは、豫て數右衛門が

不破數右衛門 平正種



KAZUEMON. HUWA,

熟知してゐる所であつたから、彼ならば墓を發いて試し切るも、内心に於て聊か恥るゝことが無いと思ひ、夜陰に乗じて墓地に忍び行き墓を發いて思ふ儘に試した後、人知れぬやうにと元の如く土を掩ふて歸宅してゐたのであつた。

然るに悪事千里の譬、此のこと何時しか知れて君家を去らねばならなくなつた。後悔しても今は及ばない、實は武士として切腹も仰せ付けられるが當然であつたが、慈愛に富んだ内匠頭は、將來有爲の青年を熟すに忍びず、自ら手討にするに云ふ名目で、密かに後庭より逃れ去らしめたので、數右衛門は飽まで寛大な主君の恩誼骨に浸み、君萬一の時には身命も惜からぬは元より、決して二君に仕われないと決心して、赤穂を退散したのであつた。

住み慣れた土地を去つてからは、彼は明石の片ほとりなる村里に

詫住居を爲て、兒童を集めて寺小屋の師匠を爲てゐた。果敢なく味
 氣なく世を過してゐると、元祿十四年三月、赤穂への早打の籠を途
 に擁して、主君が大事のことを聞いた。大いに驚いた彼は、尾羽打
 ち枯らすと雖も、猶ほ武士の嗜みとして藏してゐた先祖傳來の鎧を
 取り出し、よしや亡き君公には勘當を受けた身であるにしても、此
 の場合傍觀しては居られぬと、道を急いで赤穂城へと駆け付けたの
 であつた。元より未だ城中評議の眞中である。
 數右衛門來着の旨を聞いた内藏助は、彼が誠忠を嘆美した。然し
 ながら一旦主君よりお暇の出である者であるから、他の者の如く同
 一には取扱かはれぬ。内藏助は彼の性情を熟知してゐる、涙を流し
 て報國の途に就かむとする數右衛門の心根を哀れと思つた。而して
 遂に亡君の靈前に於て、彼が勘當を許したのであつた。

雀躍して喜んだ彼は、義を金鐵の固きに比し、必らず亡君の仇を討たねば置かぬと深く契つた。以來幾多の苦心を重ねたことは、今云ふまでも無く、他の同志の人と同じである。心身の勞苦の如きは初めより彼等の眼中には無いから、如何なる艱難に遭遇するとも決して之れを苦辛とは思はなかつたのである。

時機は廻り來つた、勇躍しながら饗家の門を入り、當るを幸ひと働いてゐたが、不斗見ると吉良家の茶坊主春齋と云ふ未だ十二歳なのが、味方に向つて灰の目つぶしを投げてゐる。それと見た數右衛門は健氣なものとは思つたが、遂にこれを討ち取つたのである。それを手始めとして、彼は最後の勇戦を爲た。何れ劣らぬ義士の面々である、働きの甲乙は茲に云ふべきで無い。唯だ彼の働きを見た君公は地下に微笑を湛えて居られることであらう。

菅谷半之丞政利

Hannojo, Suganoya. 享年四十五歳

半之丞政利は、馬廻り役を勤めて知行二百石を頂戴してゐた。武士の本務たる武藝に長ずること深かつたので、主君内匠頭は常に非常にこれを愛したのであつたが、稍や長ずる頃となつて、猶ほ武藝を修練せんが爲め、彼は暫らく故郷を後に爲たのであつた。世俗が傳へる所によると、井は彼が非常に美貌であるのに、繼母なる者が道ならぬことを云ひ寄るを避けんが爲め、特に君公の許しを得て出たのであると云ふけれども、家憲堅き武家に於てさやうのこのあるべき道理が無く、又た孝心深き彼が、繼母とは云へ、親なる人の亂行を主君に申し立て、一家の恥を他に知らしめるやうなことは決してあるべからざることであるから、恁は要するに後人が假作に出



HANNOJIYO. SUGAYA,

たものど云はなければならぬ。

然しながら彼が美貌で在たことは事實であらう、主君の許しを得て諸國を修業し、大阪まで来た時に、彼は主家の大變を聞いた。元より忠勇無比なる彼は、直ちに馳せ歸つて内藏助の幕下に付いたのであつたが、愈よ一旦赤穂を離散することになつて後、岡野金右衛門等と共に江戸に出で、本所松阪町なる吉良家の裏門のほとりに酒店を開いた。仇には知られぬやう、密かに敵状を探らむ爲めである。然も義士以外の者を使用しては露顯の基なのであるから、御用聞も帳合も、又はは店のお客の相手もせねばならぬのであつた。

昨日まで武士の身が俄に町人となつたので、何となく四圍の様子が變である。と云ふてさらでも猜疑の眼を光らして用心厳しい吉良家の附近であるから、一寸の油断を爲てもならぬ。幸ひにして他か

ら疑はれるやうなことも無く済ましてゐたが、其の近隣に住んでゐる政右衛門と云ふ大工の棟梁が在て、其の娘が常に店頭へ来ては小供を遊ばしてゐる。何時とはなしに心易くなる儘に、岡野が彼の家の様子を訊ねたところが、父なる大工は吉良家の出入りを爲し、茶室も邸も彼が建てたのであると云ふことが知れた。

討入りには先づ第一に必要なのが吉良家の繪圖面である。それさへあつたならば、案内知らぬところへ討入つたとして、前から十分に用意を調べて行くことが能る、これを得んが爲めには義士は或ひは八百屋と化て入り、或ひは扇子賣と化て危ふき邸の中へ入り込まうと爲てゐるのであるから、何とか爲て其の圖面を得やうと爲てゐる所に、彼の娘は菅谷の美貌に密かに憧れて毎日來てゐると云ふことが知れた。千載の一遇である。政右衛門が持つてゐる吉良家の圖面

を手に入れる罔は今日前に來てゐるでは無いか。

物堅き菅谷は容易に此の策に賛成爲なかつた。然しながら岡野等は口を揃へて、君父の爲めである、忠義の爲めに廻らす手段である昔より大功は細瑾を顧みないではないかと説いた。然りこれは忠義の爲めである、罪も無い婦人を用ゐて罪を犯させることは、まことに心苦しいことであるとは思ふたけれども、要するに忠義の爲めにこれまで苦心を爲てゐるのであるから、今は其の是非を問ふてゐる場合では無いと決心した。而して半之丞は彼の娘の手よりして、父が秘藏の圖面を取り出さしめた。後にそれと父も悟つたが、大義に組して娘を叱責することはせなんだ。此の圖面は正しいものであつたから、討入の時に如何に用を爲したかは知れないのである。忠魂義膽人は常に此の如く無くてはならぬのだ。

潮田又之丞高教

Matanojo, Ushioda. 享年三十五歳

又之丞は馬廻り役を勤めて、知行五百石を受けてゐた人であるが浅野家譜代の臣と云ふでは無かつた。父を主水と云ひ、古田家の臣であつた所が、不斗した事情の許に浪人を爲て、赤穂城下を少く離れた村に假住居を爲し、農家の事などを爲てゐたのであつた。が旋てのことに眼疾に罹つて困難を極め、一人の男兒を頼りに出來得るだけの手當てを盡したが、容易には全癒しさうにも無いので、孝心深き一子又之丞は、未だ漸く十歳ばかりの小兒ではあるが、日毎に父の手を曳いて町の醫師の許へと通ふてゐた。

すると或る年の春、例の如に父を勤りながら、城下はづれの松並木まで來ると、被方よりして一匹の外れ馬が驀然に駈けて來る。鞍



MATANOJIYO. USHIODA,

の上なる武士は、口には「危険！」と云ひ續けてゐるけれども、馬の前輪に取付いたなり馬を止めることは能ないのだ。これを見た又之亟は大いに驚き、父に怪我させまいと、急いで傍へに避けさせて置き、白沫食みながら駆け来る馬の前に懸乎と立ち、近寄る儘に少しも怖れず馬の轡を確と握り、巧みに輪を盡かせながら、有繋に荒れに荒れたる馬をば、物の見事に曳き停めたのであつた。

馬上の人は大いに喜び、偕て如何なる者が停めたかを見ると、これは又た意外にも幼少の少年が停めてゐるので、驚きながら其の姓名を訊ねた。此の馬上の武士こそ赤穂の先君友長公であつて、今日しも遠乗にと出られたところが、中途より乗馬が狂ひ出して既に危ふきところであつたのである。

兎も角もと馬より降り、又之亟の父なる主水の傍へ寄られ、何か

と素性を問ひ正さうと爲ておられるところへ、今日のお供を仰せ付
かつてゐた堀部彌兵衛金丸、其の他の者が追ひ付いて来た。城主は
又た主水に向つて其の素性を訊ねられた。其處で最早や隠すことも
出来ないから、古田家の浪人なることを述べたのである。
常に武勇を好まれた友長公は、近國に於ける主水が槍術の達人た
ることを夙に知て居られ、これを聞かれると其の病體を慰められる
と共に、是れ已れの臣下となれよと望まれた。主水は再應辭退した
けれども遂に承諾して、已れは最早や老年であるから、せめて息子
が成長の後には、此の鴻恩の報やうと述べたのであつたが、城主は
又た又之亟に孝心深く、其の上へ幼年ながらも、流石に父の子だけ
あつて、武術の道に優れたのを賞され、斯くて又之亟は父の代から
淺野家の臣下となることになつたのであつた。

父の病ひは旋てのことに癒え、又之亟は日々文武の道を勵んでゐたが、殊に槍の達人として一藩の人から尊敬されるほどの名人となつたのは、蓋し父の丹精の致すところであらう。斯くて事なく歳月を送つてゐたが、老父を見送り、主君も内匠頭が繼がれ、元祿十四年三月とはなつたのである。

お家大變の事を聞くと、彼は天成の誠忠何で猶豫を爲やう、直ちに馳せて義士の黨中へと入つた。清廉潔白な大精神で、如何なる苦勞も辭する所が無いと、同志の人と共に或ひは江戸に出て仇の様子を探り、或ひは身を扮して遙けき東海道を山科、京都へと使ひするものであつた。斯くて機熟し、愈よ仇の邸へ討入つた時には、役は得意の槍を振ふて強敵をば撃ち取り、千辛万苦の末漸く仇の首を得ると共に、譽れ盡せぬ忠節の名を後世に傳へたのである。

小野寺十内秀知

Junii, Onolera. 享年六十一歳

十内秀知は京都留守居役を勤め、隠居料百五十石を頂戴してゐた者である。武道の心掛け深く、又た文事にも餘程長けてゐたのであつた。當時の京都は、武士は少くて、優美閑雅な月卿雲客が住居せられてゐた土地であるから、此の地に留守居役を勤める者は、何うしても風流の道を知て居なければ勤らなかつたので、老練な十内が特に撰まれて在勤したのであつた。

精忠無比な十内は、赤穂には倅幸右衛門を残し、妻と娘とを連れて洛陽に上り、役目大事と無事に勤めてゐると、元祿十四年三月となつて、彼の大騒動が起つた。通知に接して驚いた彼は急遽として赤穂へ馳せ参じ、元より無類の忠臣であるから心は鐵石、直ちに義



JIUNAI. ONODERA,

士に與したので、赤穂退散の後、又た京都へ出て住んでゐた。これは十内が智謀もあり、勇略もある實に立派な人であるところから内藏助が萬事の相談相手と爲る爲め、山科より程近い京都に在らしめたのであつた。

敵を謀る爲めに、内藏助が遊惰の風を爲て、今日は島原明日は墨染と遊び歩いたときに、血氣に逸る若者ごもは大いに大石の心を疑ひ、時には不穩な舉に出さうなこともあつたが、斯る時に彼れ十内老人は、常にこれを鎮撫し、困難なる留守居役時代に鍛ふた外交的手腕を以て、巧みに操縦したものであるから、内藏助は安心して敵を謀ることが能たので、恁は實に容易ならざる十内が功績と云はねばならないのである。

復讐の時機は次第に近付いて来た。同志の者は人目を忍びながら

江戸へと次第に下つた。元祿十五年十月二日は愈よ大石主税も出發
 することになり、十内はこれと共に下向することになつた。復讐の
 大事を控つてゐるやうとは知らぬ老妻や娘は、急に江戸へ行くこと
 とに驚き、最早や老體であるからと云つて留めた、然しながら那
 ことで留まるべきでは無い、主税を送り届けるのであると其の場を
 繕ふて、京都を後に爲たのである。

旋て江州は瀬田のほとりまで來た時、下僕に暇を取らせて

思ひ出ば音羽の山の秋毎に色を別れし袖ぞとも見よ

と云ふ一首の歌を懐紙に認め、それをば妻の許へと送り届けさせた
 何事かと妻は開いて見ると右の歌であるから、流石に心ある十内の
 妻であるだけ、早くもそれと察し、早速又た

筆の跡見るに涙のしぐれ來て云ひ返すべき言の葉もなし

と認め、急ぎ下僕を爲て夫の後を追ふて渡させた。赤坂を過ぎる頃
に妻の返歌を見た十内は、又た

限りありて歸らんと思ふ旅だにも猶古里は戀しきものを

と認めて持たせて歸した。斯る大事を前に控わながら、優しくも和

歌などの應答をすると云ふのは、心の中に餘程のゆとりが在る者で

無ければ、到底爲し得られぬことである。斯くて無事に江戸へ着い

た後は名を重庵と變へ、砂村のほとりに假住居を爲て、自分は醫師

であること世間へ吹聴してゐたのであつた。

愈よ十四日の討入りの時には、未だ若年な主税の後見役となつて

裏門から乗込んだので、堀部彌兵衛と共に、老年の身であるにも拘

はらず、勇氣は壯者を凌いで天晴れな手並を現はし、消ぬぬ美名を

千載の後にまで垂ねたのである。

小野寺幸右衛門秀富 Koemon, Onodera. 享年二十八歳

秀富は、京都留守居役小野寺十内の養子で、大高源吾の實弟であ
る。未だこれと云ふ役目は仰せ付かつてはあなかつたが、流石源吾
が舎弟であるだけ、幼少の時から武道を勵み文事に親むたものであ
るから、それを見込んで十内が養子と爲たのである。

昔から云ふ通り、忠臣は必らず孝子の門に出るとか、後に至つて
義士の龜鑑と尊まれる幸右衛門は、養家へ入つてから後は、更らに
心を籠めて養親を大切に爲し、能く孝道を盡したものであるから、
太平の時に於ては孝子の龜鑑とまで稱された程である。

然るに元祿十四年三月、主君刃傷の凶變が傳はると、彼は平素の
君恩を報ゐるは此の秋であると、養父十内、實兄源吾と共に慨然と



KOUEMON. ONODERA,

して起つた。而して兄は弟を、弟は兄を互ひに勵ましつ勵まされつゝも時の來るのを待たのであるが、彼は京都又は赤穂ばかりに住んで、江戸の人には多く顔を見知られぬを幸ひ、姿を變じて早くより江戸へと赴いたのである。

然しながら京都を出發する時は、斯る大事を企てゐることを、養母にさへも知られぬ爲め、暫く江戸へ出て、相當な良き奉公口を探すと云ふのを名目として出たのであるが、實は二君に仕ゆるやうな心は少も無い、燃ゆるが如き義心は全身の血を漲らして、唯だ吉良上野を討たうと云ふ考ねより他には無いのである。

江戸へ着くと最早や武士の姿は爲て居らぬ。誠の武士の心を胸の奥深く燃んで、吉良家の邊に酒屋を開いてゐる同志岡野方の樽拾ひとなつた。昨日までは刀柄を握つた手で、見るも可憐しい麻繩を結

んだ貧乏徳利を握つたのである。當時の習慣として武士と云へば此の上も無い権力を有ち、町人の如きは非常に卑しきものであるとしてあつたのであるが、彼は忠義の爲めには一時の恥辱の如きは念頭に置かないで、卑しめられてゐる町人に姿を扮し、然も卑しい樽拾ひを爲たのであつた。

大義を遂ぐると云ふことの以外には、自己の名聞などは少しも思ふて居らぬ、已れが忠臣だとか義士だとか世人から云はれたいが爲めに、物數寄に此の大事を企たのでは無い。一命を君の爲めに捧げ三代相恩の君家の爲め、遺恨の髓に徹したる上野介を討ち取らうと衷心から苦心慘憺してゐるのである。されば樽拾ひが卑しいからとてそれが何だ、卑しいが爲めに忠義は汚れはせぬ。眞の忠臣義士は斯ることは意に介して居らないのであつた。

彼は已れ一人ばかりで無く、養父の名、又た兄の名を汚してはならぬと、深く心に決したことがあつた。さればこそ卑しい仕事にも甘んじてゐたが、愈よ打入りとなると彼は裏手の方より進んだのであつたが、偶見ると裏玄關には多くの弓に弦を張て、萬一の時の用意が爲てある。これを見ると年こそ若けれ、老練なる十内に仕込まれた彼のことであるから、功名に焦るやうなことはせず、又向ふ敵をば味方に譲つて、彼は片ツ端から弓の弦をは切り去つた上に、猶槍などの立掛けてあるのは、皆穂先を切つて捨て、物の役には立たないやうに爲た。斯くて後に心を安んじて、勇を振つて奥へと踏み込み、女小供には目も呉れず、手向ふ者をば相手として、獅子奮迅の勇を振ひ、天晴れなる功名を爲たので、實に彼の如きは忠と孝とを全ふした尊敬すべき人であるのだ。

間喜兵衛光延

Kinai, Hazama.

享年六十九歳

喜兵衛光延は知行二百石を頂き、馬廻り役を勤めてゐた人で、忠義の心鐵石の如く堅い大丈夫である。元祿十四年の凶變に遭ふと共に、彼は大決心を以て、仇なる吉良上野介をば、己れ唯だ一人でありとも討たでは置かぬと覺悟を爲た。而して子息二人と共に義黨に組して、一家三人の親子が譽れを後の世に残したのである。義黨の中で、堀部彌兵衛が最も老年で、次が此の喜兵衛である。七十歳に垂んとしてゐる老體ではあるけれども、幼少より鍛ひ習した身體は、鏢鏢として壯者を凌ぎ、柔道と半弓は殊に彼が得意と爲てゐるところであつた。彼は先づ麴町に居を占め、上野介が上杉家から本所の宅へ行く途

延光原藤衛兵喜間



KIHEE, HAJAMA,

を擁して、隙あらば討たうと爲たのであつたが、仇とても決して油
 断を爲さないから、何と爲ても討つことが能ぬ、残念ではあるけれど
 も致し方が無いので、他の同志の人とも語り合つて、彼れは本所
 へと住家を移して名を隆園と變じ、夜なく出て按摩を爲ることに
 なつたのである。苟くも二百石取の武士が、忠義の爲めとは云ひな
 がら、卑しき按摩に姿を扮し、吉良家の邸の邊を流して歩く心の裡
 は實に推量に餘りあるでは無いか。

喜兵衛の目的は、斯うして流して居る中には、何時かは吉良家の
 臣下が呼び入れるであらうから、其の時には邸内の様子を探つて呉
 れやうと思ふたので、決して他の家から呼び込んで貰ひたくは無
 いのであつた。然しながら吉良家は用心頗る堅固で、從來出入りを爲
 てゐた者でも、門札が無ければ、決して門内へ入れることを爲ない

から、容易に近付くことは能なかつた。けれども一念凝た喜兵衛であるから少しも撓まない。斯う爲てゐる中には、何時か一度位は呼ぶであらうと、老の身の厭ひもなく暮れるのを待つては流して歩いてゐた。すると或る夜吉良家の邊の偶ある家から呼んだので、望む仇の家では無かつたけれども、應じて入つた所か、それが非常に快潤な男であつたから、爾來時々遊びに來ては四下の様子を眺める足場と爲たと云ふことである。

喜兵衛は老人であるにも拘はらず、斯までも心を盡して一日も早く本望を遂げやうと苦心した。此の有様を見た、其の時父と同居を爲てゐた次男の新六は、父が年寄てゐながら佻出て歩くを氣遣つてさまでせずとも、他の若き者等が、少しの油断なく奔走してゐるのであるから、時機の來るまで心長閑に待つが宜いと留めた。然しな

から喜兵衛は、例令我れ年老たりと雖も、开を口實として安閑と空しく過すべきでは無い、些少なりとも味方に益することを發見し得たならば、其の幸福は單り我が身ばかりでなく、同志全體の幸福となるのであるからと云つて、何としても休まなかつた。

老人でさへも此の氣概が有つた、況して壯年の者は、機會の來るのを一日千秋と待つたが、愈よ時機來つて四十七士の者は、各自に向ふべき部署も定められて、時は元祿十五年十二月十四日の夜半のこと、吉良家の前後の門よりして討入つたのである。此の時喜兵衛は老人ではあるが、勇氣凜然として壯者よりも鋭く、槍をば執て第一に馳せ入りながら、敵對ふ者をば討取り、或ひは味方の危ふきを助けなごして、其の働きは目覺しいものであつた。斯て本望を遂げ英名を竹帛に垂れたのである。

間重次郎光興

Nijiro, Hazuma. 享年二十六歳

重次郎光興は、同じく喜兵衛光延の嫡子である。未だ何の役儀をも仰せ付からない中に主家の凶變となつた。精忠無比な父に訓育された身として、幼少より武道に掛けては一步も他に敗を取らぬ。臣として君に盡すべき唯だ一筋の道も知つて居る。

義黨の中に馳せ參じた重次郎は、父と共に暫らく麴町の浪宅にゐたが、又た所用が在て京都なる内藏助の方へ行くと、都合上彼は當分内藏助の身邊に侍することになつた。

眼前近きところに仇の在るのを知つて、無念の齒を噛むでゐた彼は、今や海山遠きはとりに隔れ、江戸の便りを聞く度に、一日も早く仇の首を取りたいものであると、東の空を眺めては其の時機の來

興光原藤郎次重間



JUJIRO. HAZAMA,

るのを待ち焦れてゐたが、元祿十五年十月二日、稍や準備も整ふたので、彼は大石主税と共に敵地に向ふでことになつた。道中無事に江戸に着くと、今暫くの時を待つ間、吉田忠左衛門が姿を變へて出でてある餛飩屋の若者となつたのである。

竹刀を擔げた肩に、今は餛飩や蕎麥の井をば擔げ、何れの者とも知れぬ店の客に對しては、習ひ覺へぬお世辭を云はねばならぬことになつた。若しこれが尋常の世の變遷から、斯くなつたとするならば、如何な英雄も眼中一滴の涙がないでは無い。然しながら彼等義士には前途に横はる大いなる希望がある、これ位のことでは決して意に介して無い、餛飩打つ麵棒に籠る力も忠義、釜前の加減を見るのも唯だ此の忠義の二字を思ふに他ならない爲めである。

恥を忍び辛さに堪へた甲斐には、今宵を仇を討つべき元祿十五年

十二月十四日は来た。父を勸はり弟を勵まし、一家三人は三代相恩の君に報ゆべく凜然として吉良家へ向ふたのであつた。重次郎は内藏助の手に従つて表門から討入り、敵對ふ者をば槍にて突き伏せながら、奥へくと進み入て、早くも上野介が寢室へと躍り込んだのであつたが、肝腎の仇は姿も見えぬ。

折角寶の山へ入りながら、争か手を空しうして歸られやう、室内をば此處其處と隈なく探してゐると、其處へ竹林唯七も亦た大刀を提げながら入つて来た。これに氣を得て重次郎は、若しやと思ふて床の中へ手を差入れて見ると、未だ濇味が残つて居るから、これならば未だ遠くは逃げ行くまいと思ひ、何心なく床の間の掛軸を刺ぎ取ると、天なる哉此處より何れへか通ふべき間道が設けられてあるのを見た兩人は、雀躍しながら手探りに進んで行くと、小庭を控え

た物置小屋の前にと出たのであつた。
 晏天義士を憐れみ給ふたか、土豚の如く逃げ隠れた上野介の隠在は遂に發見された。兩人は互ひに此の小屋の中こそ怪しいと、先づ重次郎が長槍を執つてグザと突くと、中に確に人の氣勢が在て槍尖に手筈があつた。最早此處に相違無いと、氣早の唯七は扉を排して跳り込んだところが、小性らしき者が逃げ去つた後に、白小袖の寝衣を着た老人が慄れてゐる。有無を云はさず曳き出して見ると、正しく上野介である。兩人は天を排し地を拜して喜び、直に呼子の笛を吹き鳴らし、同志の者をば此處に集めた。内藏助を始めとして一同は宙を飛んで駆けて來た。斯くて一年有餘日の間千辛万苦を爲して狙つてゐた仇の首級は芽出度く討ち取り、忠勇義烈の名を万世に耀やかすことになつたのである。

間新六光風

Shinroku, Hazama. 享年二十四歳

新光風は、間喜兵衛の三男である。幼少の時から極めて勇氣に富み、大膽であつて武術に長けてゐたのであつたが、未だ青年のころであるから猶ほ文武の道を練磨するのに怠らないのであると、不幸にして主家の凶變が湧出する事となつた。
 忠烈なる父、正義を持する兄を有た新六は、此の場合何とて人後に立つやうなことがあらう、匪賊の恨みも必らず復さねば置かぬが眞の武士である、彼は悲憤の情内に燃え、此の恨み身を替にするも復へさでは止まずとの大決心で、蹶然として父兄の驥尾に付かむと決したのである。

義士の何れを見ても、其の精力の絶大なのに、先づ威服せねばな

新聞六藤原光風



SHINROKU. HAJAMA,

らぬが、新六も亦た青春の血は裡に漲つて、凍たる大精神は到るところに發揮されるのであつた。赤穂を退散すると、彼は父と共に江戸へ出た、而して常に同志を促しては、一日も早く事を擧やうと努め、京都なる原郷右衛門の方へは、二度も其の督促を爲たほごであつたのであるが、然し世の青年のやうに決して輕卒なことはせぬ。何處までも最後の勝利を期して謹むでゐた。

寐る間も心を緩めず、仇を討つべき方策に腐心してゐると、不斗或る大工の棟梁が、吉良家普請の節に認めたる繪圖を有してゐることを聞き、彼は天へも昇るほどに喜んで、それとは無しに手を廻して其の繪圖面を得やうとした。ところが殆んど相談も調ふたと思ふ時に、何處から聞き出したものか、彼と同居してゐる中田利平太と云へる然も同盟の一人は、何と考へたか大工の棟梁と相談して、金

拾圓ならば賣らむと云ふことを申し込まされたのであつた。秘密の上にも秘密を要することを、斯く表面ちて云ひ込まれては最早や爲方が無い、残念ながら此方には不用なりと云つて斷つて了つた。

中田はこれ聞き、既に我が卑劣な行ひを知られたを悟り、何れへか逐電して了つたのである。新六は大いに考へた、彼既に變心するからには、何時如何なるところへ我等の大望を密告するかも知れない、これは實に容易ならざることである。知た彼は、千丈の堤も蟻垤より崩るゝ譬を思ひ浮べ、慄然として膚に粟の生ずるのを禁じ得なかつたのである。

斯て此の憎むべき醜漢を先づ討たんと決心した新六は、常に市中を徘徊して搜索してゐた、すると天は義黨を冥助する所あるか、一日彼は斗らずも神田の某る風呂屋に於て、逆臣中田の姿を認めたま

のであるから、事に托して醜淡に争論を持ちかけた。争論の末は刀である。腕の制裁である。義に逸る眞の武士が、大なる怒りを以て向ふのであるもの、醜淡如何に剣法に精しいと云ても、邪は遂に正には敵し得るものではない。中田は物の見事に天罰を受けて、紅に染つて路上に倒れたのであつた。

然しながら表面は唯だ一個の浪人に過ぎぬ新六は、中田に人に知られぬ罪悪はあつても、其の生命を断たと云ふので暫く平間村へと姿を隠し、時機の來るのを待つてゐたのである。一日千秋の思ひで隠家に待つてゐると、嬉しや神崎與五郎が特使となつて、愈よ討入りの報知をもたせ來たので、勇躍した彼は直に結束して江戸に入り、大石主税を大將と爲したる裏門から馳せ入り、日頃の手練を現はして忠節の名を後世に残したのであつた。

村松喜兵衛秀直

Khei, Muramatsu. 享年六十二歳

喜兵衛秀直は江戸詰の武士で、知行百石を頂いて馬廻り役を勤めてゐたのである。性質剛毅果斷で頗る古武士の風があつた。殊に劍術と柔道とは其の極意を極め、老て益す壯んな意氣を有してゐたのであつたが、時しも元祿十四年三月、主君内匠頭が殿中に於て吉良上野介を刃傷に及んで、東照公が特に取り立てた由緒ある淺野家も茲に斷絶するの已むなきに至つた。

此の大變を知ると、流石剛毅の秀直は悲憤の涙に沈んで、當の仇たる上野介は、如何なる處置を爲れるであらうかと、老熟な彼れだけに、他の騒ぐのを他にして、我が家のことは子息の三太夫に任し熟乎見てゐたところが、上野介には何等お咎めが無いばかりか、傷

村松喜兵衛藤原秀直



KIHE. MURAMATSU,

所が癒たならば、早速出て勤めるやうこのことであるとのことを確めた彼は、茲に初めて勃然として勇士の怒りを現はした。

俄かの大變事に一家中の者は殆んど氣を轉倒して、己が家財を取纏めるに狂奔して居るのが多い。此の有様を見た秀直は殊に人情の衰退して恃むに足らざるを憤慨した。而して衷心節義を重んずる秀直老人は、直ちに立つて二百里の道を走り、赤穂に至つて内藏助と共に身を處せむと爲たのである。

秀直は此の時既に六旬の老人である、世の常の者ならば子息に家を繼がせ、晏如として風月を樂みながら餘生を送る年である。況して彼には三十餘歳になつた立派な子息があるから、普通ならば隱居の身となつて居るのであるが、心身共に鏗鏘として壯者を凌ぐ彼は一生を君家の爲めに盡すの誠心が在て、碌々として餘生を送るやう

なことをせなんだ、殊に此の凶變を聞くと共に、自ら赤穂へ赴かうと爲た。と、それを聞いた子息の三太夫は孝心深い者であつたから老體が自ら行かずとも、代つて行かむと諫止した、然しながら忠義の心金鐵よりも堅き秀直は、それ等家人の諫止をば一切に退け、疥せたりと雖も鐵脚に鞭ちて一散に赤穂へと向つた、元より子息三太夫も諸共に行つたのである。

深慮ある内藏助が初め籠城を稱へ、亞で殉死を告げ、最後に残つた五十一人が血を注いで義を誓つたのが復讐の一大事であつた、喜兵衛父子は元より一命を君が爲めに捧げてゐる、一身を抛つて君家の爲めに盡すは平素の覺悟である。生命を賭して事に臨む者が如何なる難事に遭遇することも、何とて一寸の猶豫することがあらう、果然父子は此の盟約に加はつて、大敵吉良をば討たうと苦辛すること

になつたのである。
喜兵衛は萬事の打合せを濟せて、再び江戸へ出た。再び江戸に現はれた喜兵衛老人は、頭を剃つて町人の姿となつてゐた。本所林町に住むに依しい住家を借りて隆圓と名り、世間を欺く爲めに卑しい按摩を業とする旨に吹聴したのである。

世を忍びながら時機の來るのを待の千辛萬苦は、他の同志の者とと同じく嘗め盡し、愈よ本懐を達する時機の來たときには、彼は勇躍して内藏助の手に屬し、表門よりして切り込んだので、堀部老人と共に互ひに剛ましながら奮戦した。其の勇戦の狀に於ては、義士の誰彼働きの甲乙は無いから、今更ら贅言を費す必要を認めないのである。剛勇果敢の喜兵衛秀直は斯くて盡させぬ芳名を千載の後に謳歌され、欽仰されるのであつた。

村松三太夫高直

Sandayu, Muramatsu. 享年三十六歳

三太夫高直は、同苗喜兵衛秀直の嫡男である。嚴格にして慈愛に富める父に訓育されたる彼は、又た精忠無比の武夫となり、文武の道に長じて書を能し、劍道は眞影流の蘊奥を極めてゐた。君家の大變を知ると、父と共に赤穂に急馳し、武士の龜鑑たる同盟に加はることになつたのである。

赤穂を退散して再び江戸に出た彼は、磯貝十郎左衛門と云へる同士の一人が、名を内藤十郎左衛門と變へて、芝の源助町に住んでゐるところに同居し、卑しき新割人の姿を爲して毎日日本所なる吉良家の附近を徘徊して摸索に努めたのであつた。

太刀の櫛をば握るべき掌を以て、新割る手斧の柄を握らうとは、

直高原藤夫太三松村



SANDAYUU. MURAMATSU,

忠義の爲めとは云へ、實に其の變化の深大なのに驚かざるを得ないのである。然しながら忠義に凝た三太夫は、これを聊かの苦勞とも又た恥辱とも思はないで、唯だ専心仇家の模様を、其の一端なりとも知れたならば、それで満足であること、寒風膚を刺す冬の日も、炎熱金石も溶さんばかりの夏の日も少しも厭はず、朝疾くより日の傾くまで、毎日の如く出て行つたのである。

されど元より敵に悟られまいと用心深くするのであるから、唯だ吉良家の周圍ばかりを、無闇と歩き廻ることは能ぬ、相當な時間を計つては、他の町へ行くことを爲ねば、他に怪しまれる基となるから、其處此處と歩く中、不斗淺草並木町を歩いてゐると、圖ある刀劍磨師の家から呼び込んだので、本意では無いけれども入つて行つて頼まれた薪をば不慣れながら割つてゐた。

其の斧を一上一下する毎に掛ける氣合ひは、世の屑々たる新割屋風情のそれとは大いに異つて、多年鍛練を積むた直影流のそれである。仕事の手を留めて主人は不審の眉を寄せた、當時有名の磨師であるから、多少の心得は在るので、直に下婢をして三太夫を呼び寄せしめたのであつたが、元より何と正されても事實を述べべきでは無い、只だの新割屋と答えた。然しながら有繋の主人多左衛門は其の尋常人で無いのを見ぬき、それよりは茶菓に、或ひは酒飯に相共に興ずるに立ち至つたのであつた。

三太夫は此の刀劍磨師の求めに應じて、其の軒頭を飾るべき大看板を、物の見事に墨跟淋漓と認めた。家人は大いに之れが爲めに驚嘆したのであつたが、彼は復讐の日の近付くと共に、一日主人を尋ねて自己が舊主に歸參の叶ひたる旨を告げ、一刀の手入れを頼んだ

主人は大いに喜んで之れを快諾し、其の出来あがるに及んで、三太夫は多左衛門に厚く禮を述べながら、其の切れ味を見むと傍の一尺ばかりな柱に斬り付けた、刀は業物なり手は冴わたり、見事に切り放したので、主人も其の凡ならざるに感嘆の聲を禁じ得なうたのである、然しこれ等は三太夫が興に乗じて演じた一些事には過ぎなかつたが、後には其看板や、切つた柱が義士の紀念物と云ふので世人から大いに珍重されたのであつた。

下賤の姿に身を扮しても、心は高き正義の武士道を踏む三太夫である、時來つて愈よ打入りの時には後門の手に屬し、勇敢奮闘したる中にも、庭前に於て敵の勇將笠原長七と渡り合つて之れをば斃し切尖餘つて傍はらなる雪積む松が枝をまで切たのは有名なことである。實に及び難き義心忠魂では無いか。

寺阪吉右衛門信行 Kichiemon, Tenshika. 享年八十餘歲

太平を謳歌せる元祿の十五年に於て、然も將軍お膝下なる江戸にて仇討を爲し、天下の人士より武士の總鑑よ、義士の手本よと賞讃されたる赤穂四十七義士は、實に何れ劣らぬ忠勇無比の人達である、然もこれ等義士は、内匠頭在世の時に於て、皆武士として輕からざる恩祿を受けてゐたものであるが、中に於て唯だ一人、寺阪吉右衛門ばかりは、士籍に入らぬ輕の輕き身分を以て、自ら進んで義黨に加はつた感すべき人である。

吉右衛門は吉田忠左衛門の組下である。身は士籍にも列せぬ卑しい足輕であるが、平素から武士道を重んじて、精忠唯だ君に一身を捧ぐるを以て目的と爲て、碌々たる武士も其の大精神には到底及ば

寺坂吉右衛門藤原信行



KICHIUEMON. TERASAKA,

ざるものが在た。
 凶變が起ると共に、彼は先づ組頭なる吉田忠左衛門を訪ひ、赤心を披瀝して、若し龍城、殉死其の他の擧があるならば、必ず俱に其の末に加へられむことを願つた。忠左衛門は彼が平素の忠節を知て居る。然しながら悲ひ哉彼は賤しき身分である。堂々たる武士でさへも事に臨んで變節する者が多い世に、彼に實情を明すことは到底爲すべくも無かつたので、直接内藏助に訴ふべき旨を諭し、内藏助には密かに報告を爲て置いた。

愈上殉死を遂げむと、五十餘人が登城した日であつた。評議未だ半ばの時に、一室を隔てた所より内藏助に強て面會を求めた吉右衛門は、茲に再び嘆服し若し容れられない時には、其の場に切腹を遂ぐるの決心を示し、忠誠面に現れた。此の有様を見た内藏助は大い

に感じ。特に彼を士籍に列して同盟の一人に加へた。

それより彼は常に大石の傍に在て朝夕の用を使ひ、或る時には東に使ひ、或時には西に使ひして、少しの寧日は無いけれども、これ元より覺悟の前である、よく以前の如く身を謙遜つて同志の人を重んじ、如何なる勞苦も少しも厭はず、唯だ忠義の道をのみ心掛けてゐたので、彼が恩誼に酬ゆるの厚いのは、組頭忠左衛門の父より受けたる恩を思ふて、吉田が初めて赤穂に仕える時、所要の物に困却してゐるのを見るに忍びず、自己の愛娘を遊里に賣り、其の金を以て之れを救はむと爲た一事でも、彼が如何に感恩の義に厚いか判るのである、若し天れ如何なる事情よりして斯の如き事と成たか云ふ詳細なことは、今は到底狭き紙面を以て説き盡すことは、爲し得ざることであるのだ。

武道に長け、恩誼を重んずる彼は、時に同志の人の下僕の姿となつたこともある。が、愈よ討入りとなるに、内藏助は彼をば傍に呼び寄せ、己れは總てを指揮しながら傍を放さない、これは内藏助に大なる考へのあるところ、旋て無事に本望を達した後、急ぎ共に泉岳寺に引き揚げやうとする時、内藏助は吉右衛門に一の密書を渡し、これより主人の弟君大學様及び大石の妻子、其他同志の妻子の家を歴訪して、名譽ある今宵の實情を告げむことを委した。吉右衛門は共に切腹を望むけれども、これ亦た忠節の一たるを縷述されて、遂に其の場から同志の人と別れ、諸方に無事に使ひを果して再び江戸へ来た時には、早や義士は切腹の後で、早速事情を具して上に訴へたが、忠節を憐むで取上げられないから、遂に剃髮して赤穂の華岳寺に趨き、義士の後をば吊ふたのであつた。

勝田新左衛門武堯 Shinzenemon, Katsuda. 享年廿四歳

新左衛門武堯は、お籠脇の徒士を勤め、十五石五人扶持を頂戴してゐた武道の達人である。平素は極めて温順であるけれども、其の温厚たるや裡に烈々たる英氣を包むで、猥りに之れを發せぬ眞の武士の温容であるのであつた。

主家に凶變が起るに及んで、忠烈なる彼は、平素の君恩を報ゆるは此の時である、深く内藏助等と相結んで血を啜り、妻子を其の實家なる旗下の士大竹重兵衛方へと托し、己れは姿を變て仇家の様子を窺ふべく、八百屋となつたのであつた。

重兵衛は老人とは云へ、元より正義を好むの士であるから、彼が妻子を托するのは、必ずや大なる希望が在てのことであると推察し

勝新田左衛門源武堯



SHINJAEMON. KATSUTA,

て快よく諾ひ、其の消息を待つてゐたところが、以來杳として何の便りも無いから案じてゐたが、白駒は過ぎて早や元禄十五年十二月十二日、所用が在て本所へ行き、兩國橋に差掛ること、見るも憐れな八百屋姿を爲したる新左衛門に逢つた。計略であるとは知る由も無い重兵衛は、愛婿が變り果たる零落の姿を見て、且つ嘆しながら來訪の上、共に將來を圖らむことを約して別れた。

假裝してゐるのであるから、直にも尋ねて男や妻子を喜ばせるは容易のことではあるが、深重なる態度を持してゐる勝田は、逸る心を辭めて別れた。越ゆる一日、愈よ今宵は討入りと云ふ日になつて近親ある者はそれとなく別れを惜むべく訪問することになつた、茲に於て新左衛門は、以前の憐れなる姿を脱ぎ捨て、衣服大小立派に着して男重兵衛の宅をば訪ふた。

昨日に變る姿に不審の眉を寄せながら、偕ても武士たる面目を保つて尋ね來たかと、男も喜べば妻子は元よりのこと、手を執て奥へ請じたのであつたが、勝田の口からは彼等に意外なことを聞かれた。開は他でも無い、今回東北なる大名に召抱えらるゝ事となつたに付ては、自分は明日江戸を出發せねばならぬ、先方へ到着の上家屋敷等萬事整頓したならば、其の時妻子を引取るに付き、暫時別れを惜むと共に、此の報告に來たと演べたのである。

義心に富める重兵衛は、我が愛婿が故君の仇をも復さず、二君に仕ねると聞いて大いに立腹した。武士たる道を説いて盛んに新左衛門を苦しめた。新左衛門は今宵の大事を胸に疊み、妻子と愛別離苦の情に、殆んど落涙にも及ばんと爲たが、大丈夫の鐵石心は私情を棄て能く此の苦惱に堪へ、明日男の怒解けたる後に見せよとて、一

封の書を殘し、雪降る中をば立ち歸つたのであつた。愛婚の行爲を憤慨する男、夫の心を疑ふ妻を後に、事に托して事實を飽まで秘して別れたる新左衛門の胸中を付度すれば、實に世の最も大なる悲劇として同情の涙に咽ばざるを得ないではないか。

されど唯だ忠節を思ふ新左衛門は、此の堪へ難き苦しみに堪へて時刻の來るを待ち、内藏助の手に屬して表門より討入り、平素より鍛練爲したる武術の精妙を現はし、猛虎の荒れたるが如き勢ひを以て敵に當り、實に目ざましき働きを爲して、遂に本望を遂げたのであつた。翌朝に至つてそれと聞いた大竹重兵衛の喜悅は何に譬ふる物も無いほどで、老體を厭はず態々泉岳寺まで馳せ行き、涙ながらに其の成功を祝したのであつた。熱情も溶く能はざる鐵石心を有する新左衛門の如きは、眞に武士の龜鑑である。

岡島八十右衛門常樹

Yasemon, Okajima. 享年卅八歳

八十右衛門は勘定役を勤め、知行百石を頂戴してゐたので、天性清廉潔白、邪曲を惡むこと蛇蝎よりも甚しかつた。さればこそ最も情實の纏綿しやすき勘定役を勤め、上下から多大の信用を有してゐたのである。此の役目を奉じてゐるからには、元より算數の道に達してゐたのは云ふまでも無く、厘毛の微も忽緒にせぬ。然も世間普通の出納を掌とる者とは大いに異り、武士の本分たる武術に長けて練達の譽れ一藩に高く、加ふるに刀劍古器の鑑定にも亦た一頭地を抽いた眼識を有してゐるのであつた。

内匠頭未だ在世の頃、日頭風流を好む所から、家老大野九郎兵衛が紹介を以て、千金を投じて小倉の色紙を購はうと爲た時、一日内

岡島十八右衛門藤原常樹



YASUEMON. OKAJIMA,

匠頭は色紙を示して之れを岡島に相談された。八十右衛門は謹んでこれを披見すると、色紙は巧妙なる手段によりて作られたる贋物たるを知つたものであるから、精忠なる彼は直ちに内藏助と計り、事に托して君を諫めたから、元より聰明な内匠頭は、早くも兩人の心の存る所を知て、買上の沙汰は遂に中止された。陋劣君を賣るも厭はず、唯だ利慾のみ是れ望んだ九郎兵衛は之れより大いに岡島を憎んで時々侮辱を加へることもあつた。

旋てのことに凶變は湧き出した。太平の夢を驚かされた赤穂城中は、實に上を下への騒動を極めたのである。然も内藏助が機宜の處置に出たので、従來通用してゐた金札までも現金に換ね、領内の人民を爲て少しの損をも爲せなかつた。此の煩はしき手数を厭はず見事に處理したのは、彼れ岡島八十右衛門が忠勤であつた。多くの人

民は隨喜して感謝したのであつた。

然るに金銭の他に何物をも知らぬ醜漢九郎兵衛は、陰に岡島等が
 用金分配に際し、何等か曲事を爲したる物の如く云ひ做した。これ
 を聞いた岡島は激怒した。君家の滅口を眼前に見て悲憤道る方なき
 今日、屑々たる金銭に眼を付くるが如き岡島では無い。然るに平素
 醜惡なる彼れ大野から此の誹謗を受けては、最早や猶豫することが
 能なかつた。激怒してゐる岡島は、直に九郎兵衛と黒白を争ふべく
 大野の玄關へと赴いた。

大義の道を知らずして、唯だ生命惜しさに退散の用意に忙しげで
 あつた九郎兵衛は、岡島が忿怒じつゝ來り罵るのを聞き、身に覺え
 ある事として卑怯にも姿を隠し、如何に云ふも面會することをばせず
 して、其の夜家財を纏めて遠く逐電したのであつた。

忠烈なる岡島は、大野が振舞ひを笑止に思ふたが、卑劣漢をば何時まで相手に爲て居るでも無いから、其の行衛を索めるが如きことはせず、直に義黨の中に組し、仇の動向をば探る事となつたが、彼は暫らく京都に足を留め、内藏助の爲めに諸種の協議に参することになつたのである。

斯て諸士が幾多辛勞の結果、愈よ仇家に亂入するの期が近付いたので、彼は元祿十五年九月二十日京都を發し、江戸に着して暫時機を待ちたる後、遂に十二月十四日天運山り來つて本所なる吉良家へ討入ることになつた。何れ劣らぬ武術の達人が死を決して忠義の爲めに切り込む太刀先であるから、元より向ふ敵とはあらぬ。今宵八十右衛門が死力を盡して奮戦した状況は云ふ迄も無く天晴れなもので、其の名も高輪に今も猶芳名を残して居るのである。

大石瀨左衛門信清 Senemon, Oishi. 享年三十七歳

瀨左衛門信清は、知行百石を頂いて馬廻り役を勤めてゐた人である。何れの藩に於ても、武術の優れた者を撰みて馬廻り役を勤めさせたので、此の瀨左衛門も一刀流の達人であつた。頗る忠節を重んじたことは今更ら云ふ必要が無い。

盟約に加はつて赤穂を退散した彼は、當の仇を討つまでに、今一人主君の仇を爲したる者をば討ち取らうと決心した。彼が他の一人の仇と云ふのは他でも無い、内匠頭が一身一國を棄てまで吉良上野を討たうと爲た時、武士の情に放してよと云ふをもきかず、平素の大力を自慢に爲て抱き留めた梶川與惣兵衛である。梶川さへ武士の情を知て居たならば、例令淺野家は斷絶するにしても、當の敵たる

大石左衛門藤原信清



SEJAEMON. OISHI,

上野介は討ち止めてゐる。それをば邪魔したのは憎むべき與惣兵衛であるのだ。斯く信じた瀬左衛門は、黄縁を求めて梶川が隣家なる旗下の家へ仲間に住み込んだのである。

昨日までは仲間若黨を使つた身が、今日は哀れなる仲間に身を扮して、大膽にも隣家の主人を狙ふのであつたが、幸ひにも梶川が愛養してゐる犬が、自己の仕える主人の宅の犬と喧嘩を爲たので、これを見た瀬左衛門は、梶川に入るのは此の時と、六尺棒を取るなり梶川の犬をば撲殺して了つたのである。

非常に愛養してゐた犬が撲殺されたと聞いて與惣兵衛は大いに怒り、瀬左衛門なりとは露知らう筈なく、其の仲間をば我が方へ送られむことを申し込んで来た。疾より流石注意してゐた主人は、直に快諾すると共に、仲間瀬左衛門に一振りの刀を與へ、隣家へ行かし

めたのであつた。

天運來れりと喜んだ瀬左衛門は、勇み進んで梶川の宅へと行つたが、與惣兵衛は非常に立腹しながら得意の槍を打ち、瀬左衛門が待てる庭へと降り立ち、下郎の腕立て無禮なりと云ひながら、有鑿に鋭く突き來るのであつたが、精銳無二な瀬左衛門が打ち込む太刀先は頗る烈しく、槍を執ては一廉の腕前と云はれてゐた梶川も、遂に之れを受けることが能ず、其の坊に斬り斃されたのであつた。

手討にする主公が、反つて下郎の爲めに殺されたのであるから家内は騒いだ。然しながらこれを表向きにすると、近來諸侯の覺悟芽出たからぬ梶川であるから、忽ち家は斷絶の厄に遭ふのは、火を曝るよりも明かで、それと氣の付いた家人は、唯だ何となく瀬左衛門を逃した、而して表面は病死のやうに繕ふたのである。

正義に與する時は、天も地も人も陰に陽に之れを助くるものである。忠烈なる瀬左衛門は當の仇たる上野介を討つ前に、先づ梶川を狙つて首尾よく討ち果したのである、喜びながら再び隣家へは歸るべくも無いから、心に厚く禮を述べて内藏助方に行き、事の始末を語ると、聞く義士の面々は、拊舞して喜んだのであつた。

待ちに待ちたる吉良家討入りの時は來た。一二度ならず内藏助に其の期を促した瀬左衛門は大いに喜び、後門なる大石主税の手に屬して進んだ。さらぬだに武藝精妙なる彼れが、今日を最後の大奮戦である、健氣にも敵對ふ者は一人として助かる者なく、中にも吉良家の用人須藤専右衛門と呼ぶ勇士とは、互ひに名を惜みながら、劍尖火花を散して戦かひ、遂に之を討止めた働きは鬼神の如きもので忠勇義烈の譽れは今も猶ほ匂ふてゐるのである。

倉橋傳助武幸

Densuke, Kurahashi. 享年二十四歳

倉橋傳助武幸は、近習役を勤めて二十石五人扶持を頂いてゐたのである。彼は淺野家譜代の臣では無く、内匠頭の時に於て召抱えられた新參の士であるが、君恩を受くるに長短に依て厚薄は無い、一日仕わても其の祿を食めば之れに報ゐるのが臣たる道である。初め彼は弓術を以て將軍に仕ゐる家に生れたが、事情あつて生家を去り暫らく諸方を流浪して、遂に淺野家の足輕となつた。

家職たる弓術は、父なる人も驚くばかりの精妙を極め、劍道も亦た決して人後に落ちる腕では無かつた。然るに世にも憐むべき足輕と身を寄して仕ゐてゐるのは、心に何か期するところが無くてはならない。然り彼は唯だ登龍の時機を待つてゐたので、偕てこそ身を



DENSUKE, KURAHASHI,

屈して足輕の卑しきに甘んじてゐたのである。
 身に有用の材を抱いてゐる者は、何時までも長く埋木になつてゐるものではない、必ずや時機來つて之れを發見し、以て適所に自己の材を働かすことが能るものである。況んや當時武備の充實を以て天下の諸侯に欽仰されてゐた淺野家に於ては、金玉を砂礫の中に長く埋めて置くやうなことはせぬ、鳳雛は翼を張るべき時が來た。
 治に居て亂を忘れぬは、これ眞の武士の用意である。さればこそ淺野家に於ては、毎春櫻花爛發の頃を計り、家士一同が得意の武技を君前に於て演ずることになつて居る。今日しも君在府のいとて殊に盛んに演せられた。昨は劍術なりしが今日は弓術の競技日である。鷹の羽打交の幔幕廣く曲らしたる庭前、家中の諸士は今日を晴と各自の技を擅まにしてゐる、旋てのことに今日は志あるものは、例

令仲間下郎の末に至る迄、身分に關せず出て技を演せよと云ふ君公のお言葉が出た。傳助の世に出づべき時は來たのである。

蛟龍いかで何時までか池中の物たるべき、雨を得たる傳助は直に趨りて組頭のところに行き、今日の試演に自ら一筋の矢を試みたいと申し出た。元より君公が許されてあることであるから、旋て彼は矢場にと立ち現はれたのであるが、姿は卑しい足輕である。

家中の者は物珍らしげに好奇の眼を睜つて眺めてゐる、腕に覺のある傳助は少しも周章す、君前に一禮して徐ろに位置に着き、狙ふは彼方の金的！。心に弓矢八幡を念じながら、旋て満月の如く響いて兵と發てば誤たず、憂として星中に當れば並居る家中の人は思はず稱賛の聲を禁じ得なんだ。續いて又た一發、又た一發、射手の姿勢は正しく、矢は神ありて飛ぶが如く飛んで皆中る、君公を初め

並居る人は皆醉へるが如く、此の非凡の妙手を賞讃せぬものは無かつたのであつた。

希望に依りて騎射も爲た、甘いものである。君公は茲に於て彼を面前近く呼び寄せ、其の郷貫を訊されたのであつた。彼は父出羽守のことより今日までのことを残らず披瀝し、茲に初めて彼が平凡なる足輕で無かつたのを知られ、直に抜擢して近習の役をば仰せ付かることになつたのであつた。これを見ても如何に内匠頭が武藝を愛し、一技一藝の士を愛養したか、解るであらう。

此の如く彼は平凡の血脈を受けれた武士では無い。儲こそ凶變に接すると共に、將來有爲の身を殺して君恩に報むと決心したのである。生命より名を惜む武士は、實に此の傳助のやうに熱烈なる忠義の誠が無くてはならないのである。

横川勘平宗利

Kanpei, Yokokawa. 享年三十六歳

勘平宗利は臺所役人を勤め、拾石四人扶持を受けたる武士である。資性謹直、寡言にして忠勤これ事と爲てゐたから、君公の恩寵も亦た薄からざるものであつた。然るに思ひ掛けなくも凶變の湧出に遭ふて悲憤止む所を知らず、直ちに内藏助等の同盟に加はつて日夜肝膽を碎く事となつたのであつた。

浪人の身となつてよりは、彼が唯だ唯一の肉縁である叔母が、芝に住むのであるのを尋ねて常分の厄介を頼んだ、叔母の嫁し居る家は芹澤と云つて留守居役を勤めてゐるが、今に子と云ふものが無いから、勘平の來訪を夫婦して喜び迎へた。

謹直にして武藝に秀た勘平は、叔母夫婦が驕待して呉れるのを喜

利宗原藤平勘川横



KANPEI. YOKOKAWA,

び、心を安んじて滞留して、毎月命日には泉岳寺なる先君の墓前に
 香華を手向け、時に同志の隠家を訪ふては、復讐の日の一日も速か
 に來らむことを議してゐたが、世事は思はぬ事から意外の支障が湧
 き出づるものである。

叔母夫婦は自己に實子の無い所から、早晚何れからか養子を貰は
 ねばならぬ、過般より其の評議を爲してゐた折柄、肉縁の勘平が浪
 人を爲て來た、靜かに其の起座進退を注意してゐると、眞に武士と
 して寸分申し分の無い謹直家で、而も思慮綿密なところがあつた、芹
 澤夫婦はこれこそ願ふても無い幸ひであると打ち喜び、叔母よりし
 て此の旨を勘平にまで云ひ聞いた。

常惑したのは勘平である。容にこそ現さないが、遠からぬ將來に
 於て、身を殺して故主の仇を報せむとの大望を懐いてゐる身が、何

として養子などになれやう、然しながら此の大望を打ち明けて明かに断ることは能ぬ。荏苒と日を過してゐると、叔母等は種々なる策を廻らして、是非勘平の心を傾けさせやうとする、其の情を汲むでは誠に感謝すべきであるが、大丈夫一旦心に決したことは、鐵火と雖も溶かすべからざるものがある。私情と大義との間に挟れて暫くは苦闘したが、決する所は唯だ一路であつた。

旋て時機來つて今日元祿十五年十二月十四日、今宵こそ同志が打ち揃ふて仇家に討入るべき千載一遇の日、それとは無しに例の如く故君の命日であるから、墓參を致して來ると叔母に告げ、今や家をば出でやうと、他所ながら今生の別れと挨拶を爲ますると、叔母は今日に限りて何と云つても外出を許さない、嚴重に目を付けてゐて密かに逃れ出ることを許さない。謹直なる勘平はこれには大いに困

却した。強て争ふことも能ないから、我が部屋へこ入つて空しく時を移してゐたが、旋て日は暮れて同志が討入りの時刻は切迫して來た。情と義とに悶れた勘平は、最早や猶豫すべくも無いので、再び叔母に寸時の暇を乞ふと、有繋に武士の妻女である、勘平の顔色を讀み、今日十四日の命日なるを思ひ、女ながらも心に首肯いて、今度は快よく玉子酒を作り、身を温めて行けよとて、目に一滴の涙も見せず、さりげなく出してやつたのであつた。

時は既に移つて討入りの間際であつた。韋達天走りに本所を指して駆け付けた時には、今しも襲々と山鹿流の太鼓勇ましく響き渡らむとする時で、勘平は遅刻の詫を云ふより早く衣裝を換へ、遅れたれば我れこそ先陣せんと云ひつゝ、玄關に躍り込み、先登第一の首級を擧げて長く義烈の名を残したのである。

近松勘六行重

Kanroku, Chikamatsu 享年三十三歳

勘六行重は赤穂譜代の臣で馬廻り役を勤め、知行二百石を頂戴してゐた精忠の武士である。幼年より嚴重なる武士教育を受けたことであるから、長ずるに従つて臂力衆に秀で、劍法は一流の極意に達して殊に弓矢を執ては百歩の外に柳葉を射るの手練を有してゐた。然しながら其の平素に於ては、極めて謙遜以て人に交り、温言他の怒りを和ぐるのが常であつた。

早く父を失ふてからは、唯だ一人の老母に事えて孝養至らざるなく、朝夕の三省は云ふまでもなく、日に老ひ行く母を勤はるに、如何にせばやと、唯だそれのみを思ふばかりであつた。此の孝心あり必ずや君に對して忠節の大義を忽緒に爲やう、百万の敵を斃す勇を

重行源六勘松近



KANROKU. CHIKAMATSU,

胸に藏めて唯だ掬窮如として奉仕したのであつた。
 然るに時なる哉、此の忠臣孝子をして、悲憤の涙を振つて節に死
 に就かねばならぬことになつた。元祿十四年花も盛りの三月、殿中
 刃傷の凶變は赤穂の天地を震撼させた、平素口に大義を稱へ忠孝を
 説いた者も、利慾に迷ふて變節するものが少くない。見よ四百餘人
 の武士中最後まで役を守つて節を變せなかつたものは僅に五十一人
 では無いか。世間徒らに太平の世に忠節を説く者、一旦緩急ある秋
 に當りて無用の長物たる此の如しである。此の状況を見た勘六は大
 いに憤慨した、而して常の温和なるにも似ず、これ等變節漢をば生
 し置きて世に害あるを主張し、憤然として自ら彼等を討ち取らむと
 爲たのであつた。
 然しなから并は他より見たる時に於て、主君を失へる赤穂藩士は

血迷ふて同士討したと嗤笑さるゝやも知れねばこの内藏助が諫言に
 大刀を撫しながら思ひ止まつたのであつた。而して彼は老母を勦り
 ながら、一先づ赤穂を退散して、同國なる横尾村に赴き、此處に老
 先短かき母に奉仕してゐるのであつた。

元より勘六は相共に京都、或ひは江戸へ行きたいのであつたが、
 孝心深き彼は、今俄に一人の母に無限の淋しさを味はずに忍びな
 つたので、内藏助の勧めもあり、旁々時機の來るのを待つてゐるの
 であつたが、子を見ることが親に如かずとか云ふ通り、老母は疾に勘
 六が精神を觀取してゐた。而して切に東行を侷めたのである。が猶
 ほ時機ありと爲して母に孝養爲し居ると、母は遂に愛子の意氣を鼓
 舞すべく、自ら溢れて後顧の念を斷たしめたのである。孝子の悲憤
 思ひやるだに憐れではないか。

母の節義に死したのを見た勘六は、愈々勵まされて、厚く遺骸を葬り了ると、直ちに馳せて山科なる内藏助の許に參じて仔細を語り同志に慰められながら、暫く此處に時節の到來するのを待つて居ると、旋て江戸より次第に下向を促して來た。

待ちに待ちたる勘六は大いに喜び、頃は元祿十五年九月十五日のこと、間喜兵衛を初めとして同勢六人と共に、敵地に向つて出發することになつた。勇氣に満ちた同士は、さながらに世を憚りながら次第に江戸へと着き、兩國なる吉田忠左衛門が隱家へと着き、姿を扮して敵の動靜を窺ふては、其の討入るべき日等待つた。間もなく時は來た、然も故君が命日に當る十四日は夜半の九ツ時を相圖として、勘六は表門より獅子の怒れるが如く討入り、天晴れ譽れある手柄を現はして、名を後世に残したのである。

矢田五郎左衛門祐武

Gorozaemon, Yata. 享年二十九歳

五郎左衛門祐武は知行百五十石を頂き、馬廻り役を勤めてゐた剛勇の士である。太平の世に慣れ、弓は袋に納まりたる當時、武士と雖も兎もすれば細身の刀に華奢を競ひ、武臣の愛すまじき金銀の慾に迷はむとする者あるは、實に免れ難きことではあるが、これを見聞する眞の武士は、更らに憤りを發して唯だ武術を磨くに汲々たるものがあつたは自然の反應であらう。

我が五郎左衛門祐武は、天性懦弱を忌むこと蛇蝎の如く、朝夕竹刀の音、柔道の氣合を耳に爲なければ、不快を感ずると云ふほどの武道熱心家であつた。されば劍道は眞影流の奥義を汲み、柔道は殊に精妙の極に達してゐたと云ふことである。

矢田五郎右衛門藤原祐武



GOROEMON. YADA,

然も性緻密、決して粗暴輕舉を敢て爲すが如き蠻勇の士では無い
凶變を聞くと共に、彼が資性として、君家の大事に驚き、且つ人臣
たるべき悲憤の涙に咽んで、眞先きかけて同盟の義黨に加はつたの
であつたが、義黨の評議は暫らく各自退散して、時機の來るを待つ
と云ふことになつたのである。

茲に於て彼は、逸る心を押し鎮め、神明に誓つて口外せずと約し
た武士の一言を守り、最愛なる妻子にも之れを明かさず、旋て來ら
む春を待つべく、少しの知己を頼つて、大和國十津川村へと身を隠
しつゝ、伴作十郎の成長を祈つてゐるのであつた。

隙ゆく白駒の足掻きは早く、暮すともなく半歳ばかりを過してゐ
ると、山村村なる大石の方から使者が參り、兎も角も江戸へ行きて
同志の人と共に萬事を計れとのことであるから、彼は早や天地を拜

して我が事成れりと喜んだが、それにしても妻子をも連れて行けよとのことに不審を起し、如何せんかと思ひ惑ふたが、豫ての盟約であるから、云はるゝ儘に妻子を連れて十津川村をば引き拂ひ、山科にて内藏助に面會すると、萬事了解して江戸に下り、芝に浪宅を構へて塙武助と變名し、柔道指南の道場をば開いたのであつた、これは柔道の道場であるならば、日夜如何なる武士が出入するとも他から疑はれることが無いところから、江戸に在る同志の集會場たらしめむが爲め、特に斯くは爲したのであつた。

委細を了承した五郎左衛門は、人目に立たぬやう、常に氣を付けて同志の會合所の安全を圖り、万事に盡す所があつたから、泉岳寺に詣づる者、或ひは所要あつて出入する者も、安全に立ち寄り協議を凝すことが能たのであつた。

金力と権力との兩つを兼ね備へた上杉家が、手を盡して赤穂浪人の行動を探索し、父なる上野介の身の上に事なかれと警戒してゐる其の上に、本人たる上野介は流石隠居はしたが、油断なく己れの身を隠すことに苦心を爲てゐる。斯る中に身を投じて、或ひは姿を扮し、又は人相を變へ、主君の仇を討うと付け狙ふ義士等は、其の會合の場所も斯の如く苦心を爲て設けたのであつた。金鐵の如く堅き義心を以て、幾多の苦辛を嘗め盡したが、愈よ時機來つて元祿十五年十二月十四日の夜半、降り積む雪を踏みしだいて仇家に亂入した時、我が矢田五郎右衛門に於ては、十木治郎右衛門と云へる敵の中でも手強の者と渡り合ひ、暫く奮闘を續けた後に遂にこれをば討ち取り、且又た多年の宿望を遂げ、其の勇義烈を今日に謳はれることになつたのである。

奥田定右衛門高行

Sadamenon, Okuda. 享年二十六歳

定右衛門高行は、未だ青年のことであるから、何の役儀にも就いては居なかつた。幼少の時から伶俐な質で、學問の道が好き、兵書を好んで讀破したものであつた。稍や長じては劍道を學んだが、これも亦た非凡の腕を有してゐたのであつた。今更ら事新らしく云ふまでも無いが、武士と云ふものは、幾來武藝が巧手に出來ても、又た専門の學者を凌ぐほどの學力があるにしても、唯だそれだけでは、眞の武士と云ふことは能ぬ。武技や學問も必要なことは勿論であるけれども、それよりも其の學問から産み出された武士的精神と云ふものが大切である。此の武士的精神の無いものは、如何に深遠な學力を有してゐるにしても、又た武技の精

奥田定右衛門藤高原行



SADAUEMON. OKUDA,

妙に渡つてゐるにしてからが、それは唯だ巧妙に作られた機關人形と云ふ迄で、精神と云ふものが少しも無い。玩弄物としては或ひは人形も必要であらう、と同じやうに太平の世には或ひは無腸の花形武士も在て賑はひとなるであらう。けれども苟も大守が高祿を與えて平素養つてゐるのは、万一の場合に自己の馬前に其の血税を拂はむことを條件と爲て養つてゐるので、決して玩弄物として道樂に養つてゐるのでは無い。然らば總ての武士なる者は、一旦緩急ある場合に於ては、平素の恩に報ゆるが爲めに、自ら進んで主君の馬前に血税を拂ふの覺悟と用意とが無くてはならぬ。此の覺悟と用意とが即ち武士の精神であるのだ。

我が赤穂四十七士は、今更ら云ふまでもなく、世人の熟知する如き立派な行動を取つて爲たから、武士道とか武士的精神とか云ふこと

は彼等に對して云爲する必要を認め無い、これ在たが故に彼の如き堂々たることを成し遂げ得たのである。されば其の中の何人が最も優れた精神を有してゐたかと云ふやうなことは、到底論議することの出来ない問題であるのだ。

定右衛門高行は、義士の一人として、既に此の武士の最も大切な兼忠の大精神を發揮した、それには彼が幼少の時から學んだ所の學問の方が大いに助けてゐるであらう。兵書或ひは傳記を讀んで得た所も在つたであらう。平素温順決して他と争ふやうなことを爲さないで、まことに君子の如き定右衛門が感憤して、一死地下の君恩に報ゐやうと決心した所謂君子の怒りは、遂に水火も侵すべからざるものがあつたので、多く學問を修めたわけ、それだけ道理を歩むに誤りが無かつたのである。

既に死を決してゐる彼等のことであるから、住み馴れた故郷を退散してから、日々に加はる苦勞の如き、彼等に取ては寧ろ樂しき弄みと感じられたので、他が思ふ苦痛を喜んで受けた、自ら進んで求めたのである。而て愈よ乗すべき隙を得て、獅子吼の如き勢ひを以て吉良家に討入つた時には、流石に万全を期したものであるから、頗る用意の周到なるものが在つた。

よもやと思ふて夢温かな夜半を駭かし、燭火の光りに劍光を閃かして雌雄を争ふ義士の赤心は晏天の甘受する所となり、仇の首級は漸くのことと彼等の手に入つた。然しながら此の大變を聞いて仇の縁者が道に擁し、仇の首級を奪ひ返さんと計るかも知れぬ。これを危憂した義士は密に小舟を賤して、高行及び間等を爲て無事これを泉岳寺に送り、君の墓前に供わたるのであつた。

速水藤左衛門滿堯

Tozamon, Taimi. 享年四十七歳

藤左衛門滿堯は、馬廻り役を勤めて知行百五十石を頂いてゐた武士である。文武兩道に秀で、思慮の周密なるを以て君寵を受け、又た同輩に推されてゐたのである。主君内匠頭が、勅使攝待役を仰せ付かり、吉良上野介が高家の筆頭として、諸づの指揮を爲すと云ふことを聞いてから、豫て上野介が性質を聞き知つてゐる所から、何卒事なかれかしと密かに憂慮してゐたのであつた。

幸ひにして最後の日まで無事に濟んだので大いに喜び、三月十四日は、彼は茅野三平等と共に、主君に扈從して其の御殿下りを待つてゐるのであつた。然るに突如として大事は湧いた。供先に在てこれを聞いた彼の驚きは麼什であつたらう、とは云へ今は徒らに騒ぐ

早水藤左衛門藤原滿堯



TOUJAEMON. HAYAMIJU,

場合ひで無い、乃ち驚駭せる衆を静め、先づ茅野を爲て主君及傷の旨を赤穂に報せしめた。而して藤右衛門は原惣右衛門等と謀り、待つこと暫時にして主君が田村右京大夫の邸に預けらるゝ身となつたと云ふことが判然すると、彼は急遽用意を整ふる暇も無く、第二の早打ちとして赤穂に向つて走つたのであつた。

彼は其の後内匠頭が切腹したことは、元より聞かすして出發したのであつたが、大勢の赴く所を洞見し得ぬ彼では無い、幕府の掟に依て本人は切腹お家は改易のことを疾くより承知してゐる。乃ち赤穂に入る前に彼は既に死して君恩に報ゆるの覺悟を定めてゐたのである。果然第三第四の早打ちに依て、江戸に於ける始末は残りなく知れ渡り、茲に城中大評定は開かれる事となつた。

忠勇無二なる我が藤左衛門は、殉死、籠城何れにも第一に賛同し

最後の復讐にも元より加はつたのである。而して赤穂退散の旨大城なる浅野家藏屋敷に通知せんが爲め、又たもや道を急いで行く途すから、斗らずも誠忠の志を抱いて今や零落せる昔日の同輩不破数右衛門に逢ふた。此の際数右衛門は唯だ何事か赤穂に事あるらしこのことを聞知せるのみで、彼の如き大變事の湧出せりとは知らなかつたのであつた。

藤左衛門は數右衛門の誠忠を知つて居る、即ち語るに今回凶變の委細を以てした。驚ける數右衛門は、直ちに其の場よりして赤穂へ駆け付け、同志の一人に加はつたのであるが、藤左衛門はそれより速かに使命を果し、旋て京都へ出て内藏助と共に仇を謀る手段を執る事とはなつたのである。

京洛の地は大石内藏助が住んでゐるだけ、それだけ吉良上杉から

は深き注意を絶たない、よくこれを欺きて仇に油断せしむると云ふことは非常なる困難なことである。それ故内藏助を初めとして、一同の者は非常な苦心を爲るのであつて、或ひは心にも無い放蕩に身を持ち崩して、一家離散すると云ふやうな悲酸なことをも敢て爲さ

ねばならなかつたのである。

藤左衛門は、常に大石の傍に居て、此の最も困難なる仇の間諜を欺むく手段の相談相手となつてゐたので、これは老練な思慮に富むだ速水には最も適した好任務であつたのである。而して幸ひにも多くの間諜を欺むき了せ、愈よ時機來つて山科をば發して江戸に着き吉良の邸へ斬り込んだ時には、武藝に熟達した彼藤左衛門は、衆と共に猛虎の怒れる如くに大奮戦を爲し、多くの名ある敵をば斃したので、名譽は盡きず今も猶ほ残つて居るのである。

前原伊助宗房

Isuke, Maebara.

享年四十一歳

伊助宗房は知行拾石三人扶持を受けて、金奉行を勤務してゐたのである。資性極めて廉直、武術の中に於ては殊に槍術に長じてゐたのであつた。彼は元近江國の郷士の家に生れたが、常に琵琶湖の畔に出で長き竹竿の尖端を鋭く尖らしたので、水中の鮒を刺して漁るのを樂みと爲てゐた。それが次第に慣れるに連れて、活潑に泳いでゐる魚を狙つて突き刺すに、百發百中決して逸するやうなことは無くなつた、これ彼が後に至つて槍の名手となる下地であつた。少しく長ずると、彼は空しく田舎に腐ち果つるを遺憾に思ひ、是非相當の武士に成らうと志を立て、郷里を出で、資縁を求めて淺野家の仲間となり、誠實に職務に従事し、同輩から愛されてゐるので

前原伊助占部宗房



ISUKE, MAIHARA,

あつたが、或る年藩士某が乗馬で以て赤坂へ使者に行く供を吩咐かり、伊助は槍持の役を勤めるのであつた。所が此の某は馬を御する道が頗る拙劣で、殆んど見るに堪えぬほどで、道行く人も皆嗤笑して過ぎる有様であつた。丁度麻布市兵衛町へ指懸つた時、伊助は草鞋の紐を直すべく少しく遅れてゐた。先へ行た某は不幸にも當時麴町で道場を開いてゐる劍客の衣服へ泥を跳ね上げ、無禮の挨拶も爲なかつたものであるから、其の場に於て憐れにも見事に無禮打ちに斬り殺されて了つたのであつた。

斯る大事が起つて居やうとは知らず、草鞋の紐を直した伊助は急いで後を跟ふところへ、他の仲間が蒼くなつて駈けて来て其の次第を告げた、伊助は大いに驚いたが、槍を取り直すなり一散に其の場へ駈け付けて、未だ立ち去らぬ劍客に向つて主人の仇なればと尋常

の勝負を申し込むたのであつた、劍客は伊助が健氣な覺悟を賞したけれども、武士にあらぬ仲間が生命を取るも甲斐なしと一應立合を拒んだが伊助は承知しない。其處で遂に劍客も其の意を諒として勝負を爲ることになつた。伊助は勇むで槍をば構えた、が師に就いて正式に學んだ槍術で無いから變な構えだ。

劍客は之れを見て心に笑ひながら大刀を抜き、唯だ一討ちと斬り込んで來た。然しながら變な構えを爲てゐた伊助の槍は、目にも止まらず空に閃めいて、今や一步踏み出して大刀を懸ち下さうと爲てゐる劍客の胸をば深く貫いた。群衆は嘆賞の聲を禁じ得なかつたのであつた。伊助は假の主人の仇をば斯くて立派に討つた。槍の血糊を拭ふてゐると、囊に馳せ歸つた仲間の知らせを聞いて寅を飛んで來た淺野家の武士の大高源吾、武林唯七の兩人が、早くも伊助が其

の場を去らず仇をば討ち取たのを見て大いに喜んだ。

武士たる者が刀も抜かず無禮討ちにされたとあつては、其の本人の恥たるは元より、延いては藩主の恥辱である。然るに伊助が在た爲めに淺野家は此の恥辱を受けないで済むことになつたので、これを聞かれた内匠頭は大いに喜ばれ、直に伊助を武士に取立てられることになつたのであつた。伊助は意外の事から宿願を達することが能ることになつた、即ち厚き君公の恩をば身に泌みて覚え、己の功などは少しも誇らずに之れより益す武術を鍛練することになつたので、一種の素養ある槍術は殊に進歩が速かであつた。

斯て事なく奉仕してゐたが、凶變起ると共に義黨に加はり、幾多の苦辛を同志と共に嘗め盡した後、遂に本懐を達して竹帛と共に美名を後世に垂れたのであつた。

杉野十平次治房

Juchiji, Sugino. 享年二十八歳

十平次治房は近習役を勤め、金拾五兩五人扶持を受けてゐたのであつた。生來武藝を好むこと他に越え、性の好むところ自然と其の道に秀ることも早く、練達の譽れ一藩に高かつた。且つ兵書に眼を晒し、寶藏院流の槍術の妙を得て、殊に世才に長けてゐた。近習役を勤めて朝夕君公に接近する時間も長く、恩顧を受くることも多かつたので、君を思ふの情も亦た深かつたのである。

凶變が起ると、誠忠無二の彼は直に義黨の一人に加はり、早くより江戸に下つて變装を爲し、蕎麥屋となつて吉良家の模様を覗ふてゐる中に、仇家の附近に道場を開いてゐる槍の名人で、紀州浪人俵星玄蕃と云ふ人の道場を華客とすることになつた、此の俵星は當時



JIUHEIJI. SUGINO,

有名なる大先生であつたが、酒癖あるが爲めに浪人を爲し、此處に道場を開いたが、入門生より得たる金のある間、朝と云はず夜と云はず、長鯨が百川を汲ふが如く酒を飲み、酔へば其の場に倒れて熟睡して稽古を爲さない、此の如きことが續くので門人は遂に來ずなり來る者は債鬼のみとなつたのであつた。

流石の酒豪も門人が無いに困つて居ると、其の附近に住する若者等が道場を借ひことを望んだから、即ち貸賃を約して已れば盛んに酔ひを買つてゐた。ところへ夜鷹蕎麥屋に姿を扮して十平次は、此等若者に呼び込まれたのが元で、旋てのことに俵屋に近附くことが能たので、或る夜酒興に乗じて支番は槍を遣つて見せた。元より好む道の事として十平次は氣取られぬやう注意しながら、其の手並を見て密かに感服してゐたのである。

一技に秀た玄蕃である。巳の一進一退に十平次が着目する其の眼光が一般の蕎麥屋風情で無いことを早くも見て取た。酒に亂醉する。雖も百鍛の精神は亂れない。人無き時を計つて十平次を一室に招き入れ、事に托して其の赤穂浪人に非ざる無きかを正した。十平次は其の爛たる眼光に内心大いに驚いた、然しながら直ちに大望を他に語るやうな杉野では無い、玄蕃の言葉を聞いて笑つて其の村度の誤れることを答えたのであつた。雖然玄蕃は元より之れを信じないが、敢て追窮することも爲ないで出入せしめた。

上杉家に於ては吉良家に附人と爲る爲め、其の性行の如何を問はず、武藝に熟達した浪人を抱へることになつたので、此の玄蕃の所へも高祿を以て召抱はんことを申し來つた。玄蕃は赤穂浪人等が苦心して仇を狙ひつゝあることを知て居る。彼は眞の武士であるから